に至つた。所屬中隊は大隊の右第一線として展開した。所屬隊の前面には四流の川があり之等の河川南岸及び揚子崗の高地には堅固なる陣地が構築されありて絶えず右側方の敵迫擊砲と機關銃より側射を受けつゝ腰を沒する急流を渉り敵前三四百米の線に進出した。敵彈は益々猛烈を極はめたが我が歩兵砲隊到着せず已むなく現在の火力のみを以て猛攻を續けた。所屬中隊は第四番目の渡河を行はんとする時氏は右前方より我を猛射中の敵機關銃を發見して直ちに射擊を開始し僅かに二發を以て之を撲滅し渡河を安全ならしめた。其の後更に前進し揚子崗村落に接近するや村端に敵の機關銃を發見して殲滅的の大打擊を與へ以て第三小隊の攻擊前進を容易ならしめた。斯くて敵の重火器を逐次に制壓し威風凛々たるものがあつたが午後四時十分無念にも右前方敵機關銃よりの猛射に依り腹部貫通の銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。所屬隊は氏等の勇戰奮鬪に依り優勢なる頑敵を擊破し翌二十一日午前零時所望の敵陣地を完全に占領するを得た。

氏や質實剛健の孝子として又所屬中隊の模範兵として上下の信望を一身に蒐めて居た。果然聖戰に臨むや擲彈筒手の要職を課せられ其の豪膽慧敏なる克く敵情を看破し其の精到熟達せる射擊技能は適時適切に重要目標を撲滅又は徹底的の制壓を加へて所屬中隊の戰鬪威力を最高度に發揚せしめ以て赫々たる武勳を奏せしめた。あゝ斯かる有爲精悍なる勇士を早くも聖戰の初期に喪ひたるは痛恨限りなしと雖も氏の赫々たる武勳は不朽に傳へて皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　白澤喜一

忠勇なる傳令其の任務を完遂し敵前渡河に玉碎す

氏は栃木縣下都賀郡瑞穗村の人にして父を菊次亡母をとめと云ひ大正四年十月十四日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良着實にして孝心深く弟妹にやさしく又勇肌の明朗なる性格をも兼ね責任觀念に富んで居た。昭和三年三月荒川區瑞光尋常小學校卒業後東京市淀橋區柏木の某經師屋に奉公し熱心業務に精勵し雇主を初め諸人の愛敬を受けて居た。昭和十二年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊に入營し第一期教育終つて後は東京警備の任に就いて居た。

支那事變起るや同年八月坂西部隊に屬し永井中隊の中隊指揮班員として勇躍北支戰線への征途に就いた。氏は出征に當り左記要旨の手紙を家人に寄せて居る。

人選の結果私も愈々出征する事になりました。軍人として此の名譽を何と云つつていゝかわかりません。又父母として弟妹としても帝國軍人としての子を持ち兄を持つた事は先祖に對し子孫に對して家の譽と思はねばなりません。一度び戰地を踏んだなら祖國の爲めに大に奮鬪します。生きて歸らぬ武士の習ひ私も生きて歸らぬ覺悟です。弟よ妹よ仲よく助け合つて父母に孝行を盡されん事を戰地からお祈りして居ります。云々」と氏の覺悟は天晴れなものであつた。

斯くて九月初旬戰地に到着し同月十三日所屬部隊は永定河々畔胡林南方地區の敵を攻擊するに至り所屬中隊は大隊の左第一線渡河部隊として敵前渡河を强行し次で堅固なる敵陣地を攻擊した。敵は永定河の大障碍を利用し多くの日子を費して其の南岸地區に蜿蜒たる堅壘を築き極めて頑强なる抵抗を企圖して居つた。されば我軍の渡河を開始するや到る處猛烈なる火力を以て邀擊したのである。氏は此の際中隊と大隊本部及隣接部隊間等の連絡を命ぜられ屢々傳令勤務に服したが

篠つく如き敵の彈雨を物ともせず常に敏速確實に任務を遂行し中隊長の戰鬪指揮及諸連絡を容易ならしめた。

永定河々畔の戰鬪に勝利を得たる所屬部隊は敗敵を急追し檢岱鎭南公由の敵を擊破して同月十五日拒馬河々畔に進出した。敵は此の河畔にも頗る堅固なる陣地帶を設け我が軍の南下を必死と拒止すべく待ち構へて居た。所屬部隊は同河南岸の一要點たりし北相の堅壘を居るべく準備を整へ夜間を利用して敵前渡河を實施した。所屬中隊は大隊の右第一線となつたが此の夜は暗黑であり又附近は楊樹多く一層の暗黑を加はへ敵は我が接近を知りてか對岸より絶え間なき掃射や擾亂射擊を行つて居た。氏は此の際中隊と各小隊間の連絡を命ぜられ勇敢機敏且つ的確に中隊長の命令指示を傳達して渡河準備に遺憾なからしめた。而して第二次渡河部隊として中隊長と共に乘船せんとするや對岸に占據せる敵機關銃より側射を受け多數の戰友と共に壯烈なる戰死を遂げた。所屬部隊は其の後對岸に取りつき執拗なる敵の逆襲を擊退しつゝ先づ南岸に確乎たる攻擊據點を占め次いで北相の堅壘に壯烈なる突擊を敢行し十六日拂曉完全に敵陣地を占領するを得た。是れ全く氏等の尊き犧牲の賜であつた。

氏や鄕に在りては忠良の臣民であり又一家の中堅として重大なる責務を擔ふて居た。一度び聖戰に參加するや　聖旨を體して義勇公に奉ぜんと情理を盡して家人を訓ゆること切々寔に大和民族の精神躍如たるものがあつた。果然中隊指揮班員としての活躍は衆兵の模範となり中隊戰鬪に貢獻せる所甚大であつた。斯かる忠誠勇武の士を喪へるは哀悼痛惜禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや其の芳名と共に皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ其の神靈や尙も皇國を護り又一家の守護神として其の前途に限りなき加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　島谷八三

傳令勤務中敵の逆襲を急報し單身敵中に突入して行宮の華と散る

氏は兵庫縣揖保郡林田村の人にして父を光之助母を小志那と云ひ大正四年六月二十六日に生れ未だ獨身であつた。性溫良にして責任觀念に富み父母に事へて孝心厚く又事に臨みては剛毅果斷であつた。昭和五年三月鄕里の高等小學校を卒業し其後は家庭に在りて父母を扶けて農業に精勵する傍ら同村青年學校に通學し熱誠勉勵良成績を擧げ同十一年十二月同校の課程修了時には賞狀を附與せられた。同月現役兵として龍山歩兵聯隊へ入營し日夜軍務に精勵し朴直眞摯橫溢せる精神力を以て至誠一貫上官の命に遵ひ又戰友に對し信義に厚く上下の愛敬を受け信賴を博し中隊內の寵兒とされて居た。

支那事變起るや間もなく南雲部隊に屬し馬場中隊小木谷小隊長傳令を命ぜられ而して所屬部隊は急遽北寧唐山に至り同地方の警備に任じて居たが情勢更に惡化するに及び七月二十七日遂に南苑の南方約四粁に在る行宮の敵陣地を攻擊するに至つた。當時敵は主力を以て南苑に一部を以て行宮附近に位置し防禦態勢を整へ而かも抗日意識に燃えつゝ傲岸不遜の態度を示して居た。而して行宮附近を占領せる敵は同地の高地を中心として堅固なる既設陣地に據り極端なる抗日敎育と相俟ち巧に便衣隊を操縱して頑强なる抵抗を試みたのである。此日天氣晴朗にして全く無風且直射日光を受けて氣溫實に

百二十餘度に達せしが我が軍は連日の不眠不休と給養の不良且地形の錯雜と相俟ち戰力發揮に尠からざる障碍を受けた。氏は之等困難なる狀況下に於て克く自己の任務を自覺し志氣益々旺盛にして勇躍攻擊命令を待つて居た。所屬部隊は午後零時五十分行動を開始し午後二時三十分より愈々行宮附近の敵陣地に向ひ攻擊を開始したが所屬中隊は大隊の右第一線となりて展開し特に第一小隊をして敵陣地の左翼を包圍する如く部署された。氏は第一小隊傳令として中小隊長間の連絡に任ぜしが其連絡路は高粱繁茂して通視を妨げ往復亦至大なる困難を伴ひ剩さへ我が攻擊の進捗するに從ひ中隊主力は敵防禦火網の重要部に向へるを以て熾烈なる敵銃砲彈を浴び又小隊は中隊主力と離隔の度を增し益々以て連絡の困難を來たした。氏は克く他の連絡兵を併せ指揮し專心其任務を完うせんとしたが午後三時五十分頃に至り右後方より敵兵約三百名の逆襲を受け竟に連絡杜絶するに至つた。氏は其責任の重大なるを思ひ速に此敵襲を小隊長に報告し更に中隊長に報告せんとするや輕裝せる敵は咫尺に迫りたるを以て報告の餘裕なしと見最早是れ迄と決意し射擊に依り急報し次で群がり來る敵中に突入し得意の銃劍術を以て獅子奮迅數名の敵を刺殺したが衆寡敵せず無念にも頭部に貫通銃創を受け聖戰初期の華と散つた。時に午後四時十五分頃であつた。所屬中隊は氏の機宜に適する所置並に尊き犧牲に依り其後間もなく此敵を擊退し午後七時には行宮一帶の敵陣地を占領し之を確保するを得た。

氏や至誠一貫諸人の愛敬期せずして一身に蒐まり沈勇機敏遂げずんば已まざるの士であつた。果然聖戰に參加するや小隊長傳令の要職を命ぜられ劍雹彈雨の中死力を竭くして任務に邁進し竟に危機迫るや進んで玉碎するに如かずと單身大敵の中に突入して既得精練の武技を發揚以て武人の最期を全うした。あゝ參戰幾何を經ずして此有爲忠誠の士を喪へるは痛惜禁じ難しと雖も士の戰場に臨むや素より生還を期せず而かも百戰功なき瓦全を愧ぢ一戰玉碎するに如かずとなす而かも所屬中隊の危機を救ひ延いては部隊全般の戰勝獲得に尊き素因をなせしは其功績拔群其芳名と共に永く皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　笏本鐵彌

輕機關銃の全威を振ひ琉璃河々畔に戰勝の礎石となる

氏は岡山縣久米郡倭文中村の人にして父を爲男亡母をミネと云ひ大正元年十一月十日に生れ未だ獨身であつた。性溫良眞摯にして孝心深く又友情に富み諸事熱心着實にして特に義務心旺盛であつた。大正十三年秀實高等小學校第一學年修了後家事の都合に依り退學し其後は家庭に在りて父を扶け家業に精勵の傍ら秀實青年訓練所へ通學し昭和二年三月所定の課程を修了した。昭和七年十二月現役兵として朝鮮龍山步兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を擧げ同九年六月善行證書を附與せられ滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森本部隊に屬し江口中隊の輕機關銃分隊彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて八月下旬北支に到着し先づ良鄕附近の蘇家莊に於て所屬大隊本部の直接警戒に服務し次で九月九日には選ばれて將校斥候要

員となり便衣を着して敵地に潜入し馬各庄及琉璃河附近に於ける徒渉場並に河川の情況敵情の細部偵察に任じたが氏は沈着豪膽に行動し熱心慧眼克く貴重なる資料を蒐集し以て適切に斥候長を輔佐した。

所屬部隊は九月十五日愈々琉璃河々畔の戰闘を開始した。當時永定河畔に於ける敵軍は其右翼陣地たりし靜海方面に於て大敗し中央陣地たりし固安附近の敵亦我が猛攻に抗し兼ね京漢線方面に崩雪を打つて敗走中にして左翼陣地たりし京漢線方面に於て全線以西の山地並に琉璃河の線等に歩々の抵抗をなしつゝ中央敗殘軍の收容に努めたのであつた。此時所屬部隊は京漢線方面の敵を攻撃し氏は第三小隊長小野少尉の指揮下に第一線小隊の火線分隊員として四世庄附近の敵陣地を攻撃したが豫め偵知せる敵情地形に基き克く銃手に協力して敏速豪膽に行動し適切に輕機關銃の威力を發揮し此陣地の奪取を容易ならしめた。翌十六日には東瓜坨附近特に一軒家南側の陣地を攻撃するに至つたが敵亦熾烈なる火力を以て應戰し我が攻撃前進は頗る困難であつたが氏は克く有效適切なる火力を以て敵を壓倒し所屬隊は先づ一軒家南側の敵陣地を占領し次で機を失せず一軒家の線に進出して頑強に抵抗中の重機關銃を制壓し所屬分隊は更に要點に躍進を企圖し前進を起したが無念なるかな其瞬間に一彈飛來氏は胸部に貫通銃創を受けて壯烈なる戰死を遂げた。所屬中隊は戰闘開始以來交戰實に十二時間氏等の尊き犧牲に依り遂に琉璃河附近の頑敵を撃破して更に猛追撃に移つた。

氏や鄕に在りては一家の柱石として溫良着實の孝子であり又純樸の青年として其將來を囑目されて居た。出でゝ軍務に服するや忠實熱誠の良兵として上下の信頼を受け今次聖戰に從ふや滅私報國の決意鐵石の如く虎穴に入りて能く敵情地形を搜索して重任を果たし又窮鼠猫を嚙むが如き頑敵を猛攻して克く輕機關銃の威力を發揚し以て所屬中隊の前進並に突撃の動機を作爲し玆に戰勝獲得の尊き礎石を投じた。寔に是れ皇軍歩兵の精鋭にして又一般軍人の模範たるものであつた。斯かる忠勇義烈の氏を喪へるは眞に痛惜禁ずる能はずと雖も其功績たるや正に皇軍戰史に牢記せられて其芳名は後世に傳へられ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級　島田清

大行李掩護中優勢なる敵襲に遭ひ奮戰す

氏は福岡縣山門郡三橋村の人にして亡父を瑞雄母をタカと云ひ明治四十一年十一月九日に生れ妻チエ子を迎へ未だ愛子がなかつた。大正十二年三月三橋高等小學校卒業後八幡市に出で商店員となり昭和二年三月兄健次郎と共に同市に酒類店を開業した。

昭和三年一月騎兵聯隊に入營し同年七月一等兵に進み翌四年十一月歸休除隊となり再び營業に精進してゐた。資性明敏にして穩健志操堅確にして品行方正特に勤勉努力の美風を有し又老母に對し孝養怠りなかつた。昭和九年八月八幡市東通町に分家し獨力酒類店を經營するに及び信用頓に增進して大に繁昌し近隣の風評極はめて良好であつた。氏は夙に在鄕軍人分會役員に推擧され分會の庶務會計事務に或は指導啓發に献身的盡力をして居たが昭和十二年七月支那事變起るや更に

送迎慰問に會員の指導に國防思想の普及に粉骨碎身文字通りの活動を繼續し家に在りては自己既に戰地にあるものと假定して家業は妻及店員之に當れと命じ公事の外餘念なかつた事は人をして感激の涙を催うさしめた程であつた。此の犧牲奉公就中第一線將兵の心を以て自己の心とする熱意は一般會員をして奉公の念に燃立たしめたのみならず應召者の家族は勿論銃後に於ける一般の心境をも昂揚せしめたのであつて眞に在鄉軍人としての模範的人物と謂ふべきである。

斯くて氏は十月下旬召集を命ぜられ直ちに應召し小池部隊福永徒歩小隊に屬し勇躍中支戰線への征途に就いた。中支上陸後十一月十八日より三十日に至る間大行李の警護に任じたが氏は常に隊の先頭にありて前進し敵の敗殘兵を擊退せし事數度に及び特に三十日には午前七時澄心寺砧を出發し廣德に向ひ前進中午前九時三十分上泗安西方約千米に於て同地附近に潛伏せる迫擊砲四機關銃五、六を有する約千名の敵より攻擊を受けたが小隊は敵の既設陣地を利用し直に之に應戰した。然るに敵は逐次兵力を增加し其火力は壓倒的に熾烈となつた。當時氏は最右翼第一分隊に在りて敵が至近距離に近迫せるも頑として沈着に射擊を續け多數の敵を殪し以て敵の前進を制壓してゐたが午後一時三十分に至るや約百名計りの敵は我が右翼に包圍的に攻擊して來た。之が爲小隊は苦戰に陷つたが同一時五十五分友軍飛行機は爆音高く飛來した。之を見た氏は猛烈なる敵火を浴びながら直に日章旗を取り出し飛行機との連絡に努めた。然るに此時不幸にも敵の一彈氏の頭部を貫通し氏は壯烈なる戰死を遂げた。然かし氏の連絡に依り我が飛行機は敵を掃射し敵は竟に敗退するに至つた。

噫氏の任務たるや必ずしも第一線戰鬪員の如く華やかではなかつた。而かも道路不良敗殘兵所在に出沒し其危險の度に於て毫も第一線と異る所なき情況下に於て人知れず幾辛酸を克服し大敵にひるまず一死報國以て大行李の安全を確保し第一線の戰力を培養し得たるを思ふ時特に感激措く能はざるものがある。今や其人空しと雖も其誠忠義烈は後世を感奮せしめ其功績は皇軍戰史を飾り其英靈亦永世に生き皇國並に一家の前途に尊き加護を與ふる事であらう。

氏は戰死の日陸兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級　鹽野谷秀吉

靈邱阿近に寡兵克く數十倍の敵を擊退し友軍の危急を救ふ

氏は東京市小石川區關口町の人にして亡父を運吉母をきむと云ひ資性溫良父亡き後は克く母に仕へて孝養を盡し又朋友にも厚く責任觀念旺盛にして業務に熱心であつた。昭和三年三月小石川高等小學校を卒業し小石川區久堅町今泉メリヤス機械製作所に入り勤務の傍ら小石川工業學校機械科並に自動車科を修了し爾後助手として同校の教育事務に從事して居つた。

昭和八年五月現役兵として千葉氣球隊に入營し三ケ月で除隊再び前記工場で勤務に服して居たが昭和十二年七月支那事變勃發するや七月十九日召集に應じ矢島部隊に屬して勇躍北支方面に向つた。

同部隊は最初豐台附近に在つて殘敵掃蕩と軍需品補給業務に當つて居たが氏は常に勇敢に業務を遂行し數々の功績を立てた。適々九月二十四日第一線に出て新鋭歩兵の輸送に從事し翌二十五日山西省靈邱縣小寨子附近で俄然中央軍及共產軍

の連合約一ケ師の敵と遭遇し午前九時半より約三時間に亘つて部隊は寡兵を以て克く衆敵と戰つた。斯くて惡戰苦鬪の末遂に敵の重圍を突破して其の任務を完うした。此の間氏は第一小隊第四分隊貨車操縱手として小隊自動車の中央附近に在つたが雲霞の如き敵は多數を頼み地形を利用して漸次後方に迂回し腹背に大敵を受くるに至つた。氏は野口伍長の指揮下に全滅を期して奮戰之れが拒止に努めたが敵は依然近迫し來り漸次包圍の態勢を取りつゝある有様を見て氏は竟に決然今は之迄なりと身を挺して敵中に躍り入り奮戰格鬪終に腹部に貫通銃創を受けて壯烈なる戰死を遂げた。時に午前十一時半であつた。

僅々百餘名にも足らぬ我が部隊急を知り駈けつけた友軍歩兵砲と共力して數十百倍にも及ぶ敵の包圍に陷つて而かも獅子奮迅の勢で三時間の長きに亘つて奮戰克く重圍を切り拔け以て第一線直後に在る砲兵及び其の段列大小行李をして離脱の餘裕を與へたのは實に氏等の勇猛果敢なる行動に依るもので其の功績や偉大と云ふべきである。本戰鬪は實に慘烈を極はめ所屬中隊は約八十名の戰死者と約二十名の重傷者を出して居る。

氏は又戰場動務に於て氏本來の美德を遺憾なく發揮して居た。例へば自動車に依る患者輸送に當り惡道に差かゝるや優秀なる操縱技倆と細心の注意と相俟ちて徐行し以て負傷者に激痛を與へざる事に留意し又氏の疲勞困憊時に於ても假令少數乘車の場合と雖も將た又遠路不便の所なりとも常に親切に之を護送した。されば氏の世話となりし患者は一見舊知の如く親み慕ひ氏の本籍を尋ねたが氏が名譽の戰死傳はるや夫れ等の人々多數より禮狀を兼ね哀悼の弔意文が山と送り越された。以て氏が如何に懇篤なる親切心の持主であつたかを推測出來やうと思ふ。

嗚呼此の玲瓏玉の如き美德嗚呼此の秋霜烈日の如き勇武窓に奥行の深き武人と謂ふべく天晴れ聖戰の尊き人柱となりて皇軍軍人及部隊の苦難を救出し以て輝かしき偉勳を奏した。今や其人空しと雖も其の英靈は萬世に生き尚も皇國並に一家の守護神として其の多幸繁榮を加護すべく其の芳名は千載に傳へて大和櫻と咲き匂ふであらう。

氏は戰死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級　清水好男

孤軍奮戰傷つくも屈せず竟に北京郊外の華と散る（壯烈）

氏は埼玉縣大里郡藤澤村の人にして父を秋治郎母を以智と云ひ大正四年一月十九日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚にして忍耐心强く又責任觀念旺盛にして大事に臨みては頗る勇敢であつた。昭和五年三月藤澤小學校高等科を卒業し其の後上京し澁谷區代々木新町米穀商關和茂方にて商業に從事し實直勤勉諸人の信用を受けて居た。昭和十一年一月徴兵として三島野戰重砲兵聯隊に入營同年五月北支駐屯砲兵聯隊に派遣せられ十二月砲兵一等兵に進級し熱心軍務に精勵してゐた。

支那事變起るや小林部隊第四中隊に屬し一番砲手として直ちに戰鬪準備の姿勢に移つた。蘆溝橋事件勃發の翌日卽ち七月八日所屬大隊は急遽出動を命ぜられ九日早朝通州に到着し外交々渉の進展に寄與し傍ら待機の姿勢に在つた。氏はかくの如き暗雲低迷寸刻の偷安をも許さざる緊迫せる狀況下に於て火砲彈藥の整備に或は至嚴の警戒等に不眠不休連日諸勤務

に服し克く所命の任務を完うした。七月十二日氏は第二大隊觀測掛將校孤岡砲兵中尉の將校斥候に警戒兵として配屬を命ぜられ北京北側地區の道路並に敵情捜索に從事せしが此の間熱心活躍以て將校斥候をして克く其の任務を達成せしめた。其の後蘆溝橋附近に敵兵再び集中の情報を得て我が戰車部隊は氏の所屬砲兵隊の掩護下に十二日午後八時急遽通州を出發し豐台に向ひ前進した。此の時氏は警戒部隊の要員として修理班と共に行動したが途中一部車輛に故障を生ぜし爲め修理班と若干車輛とは主力部隊よりも五六時間おくれて十三日午前十一時三十分頃永定門外南側ガード附近に達した。而して該ガード南方約五百米附近に到りし時敵は我れを寡兵と見て不法にも突如道路の兩側及部隊の後方より射擊を浴びせて來た。部隊は兵力僅かに三十名に過ぎざりしも敢然之に應戰しつゝ進路を驀進した。氏は携帶せる拳銃を以て勇敢に應戰中右上膊部に銃創を受けしも之に屈せず奮鬪しつゝありしが第二車輛は馬村衛門前に於て半輪廻轉せんとせしも小型乘用車を牽引せる爲め行動意の如くならずかくと見たる敵は衛衙門樓上下より重輕機關銃の集中火を注ぎ來り其の行動をして益々困難ならしむるに至つた。此の間剛氣の氏は身の重傷をも顧みず勇敢にも掩護歩兵と共に尙も力戰し衆を恃める支那兵の制壓に努めつゝありしが愈々自動車運轉不能となるや彼等は益々猛烈に射擊を加へ來り氏は爲めに左胸部及腹部に銃創を蒙り其の場に倒れて竟に起つ能はざるに至つた。しかし氣丈の氏は尙意識明瞭にして「俺にかまわず行動して呉れ」と言ひつゝ終に人事不省に陷つた。軈て積載彈藥車輛諸共爆裂するに及び更に腹部及兩下肢に爆創を受け午前十一時四十分

竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏偶々衆敵の包圍を受くるや大敵たりとも懼れず沈着勇敢孤軍奮鬪掩護の任務に邁進し傷つくも屈せずしかも其の死期迫るも念頭任務を忘れず部隊は血路を開かんことを慫慂す。實にかくの如きは職責の存する所身命を君國に捧げ一死以て其の任に斃れんとせる軍人精神の精華にして盡忠至誠の發露と謂ふべきである。氏や事變勃發幾日もなく北京城外に華と散りしは痛惜に堪へざるも開戰劈頭暴慢不遜の敵に對し一戰玉碎して以て寡兵克く皇軍の威武を宣揚したる拔群の武功は職責遂行の示範と共に千載に亘り皇軍戰史に輝き其の英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた、

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　海老沼芳雄

輕機射手、小隊の義務を雙肩に荷ふて外長城戰線に玉碎す

氏は東京市荒川區尾久町の人にして亡父を壬一母をマツと云ひ大正四年十一月三十日に生れ未だ獨身であつた。資性極はめて溫順責任觀念强く處事積極的にして衆人より愛敬せられてゐた。而かも大事に臨みては沈着勇敢であつた。曾つて松戸町在住中同町大火の際出動の工兵隊に協力し勇敢に防火工作に應援し時の指揮官より激賞せられ其の後も定業の餘暇其の附近の破損家屋の修復に奉仕し今猶感謝の辭を受けつゝあるが如き美談を持つてゐる。昭和四年三月東京市立赤土小學校高等科一年を修業し其の後直ちに千葉縣松戸町倉田工務所に入り建築土木業を修得してゐた。昭和十一年一月徴兵と

して麻布歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵中同年五月滿洲に派遣洮南に駐屯同年七月以來檢膽縣下の匪賊討伐に更に十二月の冬季大討伐に從ひ其の後檢膽縣北城並に齊々哈爾北方三十里の地點に於て警備に任じ翌年三月は北安鎭及黑河一帶の討伐に參加する等滿洲の治安肅正に貢獻せる所甚大であつた。此の間昭和十一年七月第一回に精勤章を附與せられ翌十二年五月　梨本宮殿下齊々哈爾御成の節は選ばれて御警衛兵奉仕の光榮に浴する等模範兵として上官の信頼厚かつた。

支那事變起るや小林部隊第十中隊に屬し第三小隊第一分隊輕機關銃射手として昭和十二年七月末勇躍征途に就いた。北支戰線到着後八月二日より九日に至る天津附近の掃蕩に引續き同月十四日よりの外長城線附近の戰鬪及ひ萬全附近の戰鬪に參加し勇戰奮鬪克く其の任を完うした。

所屬中隊は萬全占領後敵を追擊し八月二十五日午後一時より永定河左岸に據る敵陣地に迫り翌二十六日午前にかけ引續き對峙中聯隊命令に基き當面の敵を擊破し老鴉生に向ひ攻擊を行ふことゝなり二十六日午前十時當面の敵に對し攻擊を開始した。敵は中隊が攻擊前進を起すや猛烈なる射擊によつて抵抗を開始し玆に激戰を展開するに至つた。氏は此の間熾烈なる敵彈を物ともせず沈着正確なる射擊を以て敵を制壓して小隊の攻擊前進を容易ならしめ逐次一進一止して遂に敵陣地前至近の距離に肉薄するや益々火力を最高度に發揮して敵を震駭せしめ突擊準備に努めた。正午頃となるや敵第一線動搖を來すに至り右第一線たる所屬小隊は此の機を逸せず永定河左岸陣地に突入し氏も同時に突入して遂に之を奪取し機を失せず敗敵を猛射し多大の損害を與へ引續き小場に向ひ追擊前進中突如約五十米前方の高粱畑中の陣地より敵は狼狽しつゝ猛射を浴びせて來た。然るに此の際輕機關銃の伏射は不可能なりし爲め氏は身の危險をも顧みず腰間照準を以て蝟集動搖中の敵に對し猛射を浴びせ敵將校以下若干名を殪したるに敵兵益々動搖の色あるを見て取りし小隊長は此の機を捉へ將に突擊せんとするや敵は手榴彈を亂投して尙ほ頑强に抵抗すると共に其の後方百米にある部落の圍壁內より俄然自動火器の掃射を浴びせ來り其の火力熾烈なりし爲め小隊の突擊は一時頓挫の已むなき狀態となつた。かくと見たる氏は果敢にも速かに前方に進出して沈着正確なる照準により前面の敵及圍壁の敵に猛射を加へ小隊の突擊を誘發せんと努むる折しもあれ無念敵彈左胸部を貫き竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。時に午後二時頃であつた。併し中隊は氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより間もなく敵陣を奪取し追擊に移ることを得た。

氏の戰陣に立つや彈雨の下勇敢終始第一線に進出し或は身の危險を顧みず高姿勢をとり而かも其の射擊たる沈着正確只管効果の發揚に全魂を傾倒し眞に小隊の戰勝を双肩に荷ふて立つの概があつた。眞に是れ皇軍歩兵の精華にして又一般軍人の龜鑑たる者であつた。然るに聖戰幾何もなくして氏の如き良射手を喪ひしは眞に痛惜に堪へざるも奮戰玉碎皇軍輕機の精鋭を遺憾なく發揮し暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は滿洲事變の功績と共に千載の下皇軍戰史に輝き不朽の芳名は後世に語り傳へられ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國の聖業を守護し又一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　遠藤榮三郎

沈勇慧敏の勇士、頑匪を撃破し三江省南天門に玉碎す

氏は福島縣耶摩郡北山村の人にして亡父を小畑榮三郎亡母を同ハツと云ひ大正五年十月二日に生れ遠藤喜一及び同ミキの養子となり妻トラ子との間に長男進を擧げた。性溫厚にして孝心深く諸人に對しても親切であつた。又寡默にして實踐躬行不屈不撓の氣慨を有し世人の信望厚かつた。昭和四年三月會津東山尋常小學校卒業後直ちに若松商業學校に入學し同七年十月第四學年第一期修了と共に岩倉鐵道學校本科業務科へ入學同九年三月同校を卒業した。氏は頭腦明晰にして小學校時代より首席を占め柔道庭球野球キャンプ水泳スキー等の趣味を有し就中水泳スキー及び音樂は其最も得意とする所であつた。昭和十二年一月現役兵として若松歩兵聯隊へ入營し機關銃中隊に編入せられたが學術科の成績優秀にして同年兵の第一位であり幹部候補生の首席者に比するも尙劣らざる程であつた。所屬部隊は同年四月滿洲駐箚隊となり三江省通河に駐屯し同地附近の警備に就いたが氏は佐伯部隊中澤中隊に屬し翌五月中旬鐸子山附近に蟠居せる匪賊の討伐に從事するや氏は克く懸崖を攀登して敵の據點を奪取し又山寨匪家の覆滅等に最も勇敢に奮戰し以て中隊の任務達成に多大なる貢獻を與へた。

五月下旬より六月初旬にかけては濃々河上流地區の討伐に參加したが氏は三星囤子山及び大青頂子等連山の嶮岨を踏破し小匪團の掃蕩及匪家の覆滅に終始志氣旺盛勇敢に行動して所屬中隊の戰鬪を容易ならしめ殊に中隊主力と青木小隊との連絡杜絶せんとするや自ら進んで險難なる山岳地を超えて連絡を確保し以て戰勝の基礎を確實ならしめた。

七月中旬に至り關團長、明鍚、占海龍等の合流匪約二百名は三江省の治安攪亂の目的を以て松花江畔南天門附近に蝟集しありとの情報を得佐伯部隊は急遽之を掃蕩すべく浦山隊に之れが討伐を命じた。此際中澤中隊よりは一部の機關銃及び小銃編成の部隊を狩野准尉に指揮せしめ浦山隊に配屬派遣する事となつた。討伐隊は七月十六日夜半松花江を遡航し方正縣西方南天門の北側黑江口に上陸し敵匪を求めて行動中十七日午前四時十分頃に至り吏家歲子附近の土壘及家屋を利用し防禦陣地を占領しある敵匪約二百名を發見し直に之れが包圍攻撃の準備を整へた。氏の小隊は敵陣地の正面に向ひ氏は其火線分隊たる輕機關銃第一彈發手として之れに參加した。此時氏の分隊は敵彈雨飛の中を物ともせず敵前百五十米に接近し小隊の最右翼に射撃位置を占め猛烈なる射撃を開始した。敵の陣地は巧に僞裝を施しありて其發見頗る困難なるのみならず敵の射撃は正確にして中隊の攻撃前進意の如くならず戰鬪漸次激烈となつた。此時所屬分隊長は戰況を打開せんと欲し速かに右前方に射撃位置を變換し氏をして分隊長と小隊長間の連絡を確保せしめた。氏は分隊位置移動するや速かに小隊長に之を報告し且適切なる地點に位置し敵情搜索に努むると共に射彈觀測に任じて分隊長の射撃指揮を容易ならしめ以て輕機關銃の威力を最大限に發揚せしめ又好機に投じて敵の指揮官を狙撃する等小隊全般の戰鬪を有利に進展せしめて居たが敵亦益々猛火力を以て我が前進を阻止し戰況愈々凄慘を極むるに至つた。豪膽不敵の氏は冷靜更に動ぜず任務を續行中偶々敵の輕機關銃の現出を發見して之を分隊長に報告し又自ら之を狙撃し之れが制壓に努めた。所屬分隊は此新目標に對し正確且猛烈なる火力を集中し一時之を沈默せしむるに至つた。然るに其一瞬憎むべき一彈飛來氏は胸部に貫通銃創を

受け幽かにも萬歳を唱へて壯烈なる戰死を遂げた。所屬小隊は其後間もなく敵陣地に突入し頑敵を擊破して追擊を續行し十九日には全く敵匪を掃蕩して駐屯地に歸還した。

氏や忠孝一本の信念胸奥に横溢し且能あれど默々として邊幅を飾らざるの人往くとして可ならざるなく一隊將兵の深き信賴を博し特に中隊長の寵愛を受けて居た。斯くて不逞匪賊の横行するや勇躍討伐に從ひ時に濕地密林を踏破して匪情を搜索し時に峨々たる山岳を登攀して所屬隊の爲有利なる地歩を獲得した。而して南天門の激戰たるや敵は地の利を占め我は敵より俯瞰さるゝ豆畑刺さへ其畝さへ敵方に伸びて遮蔽物ともならぬ不利なる地形に於て常に率先身を挺して分隊の前進を誘起し慧眼克く敵情を搜索し難局に處し沈勇機敏戰勝の一素因を作つた。あゝ前途有望なる此忠勇義烈の士を喪ふ眞に痛惜の情を禁じ得ない。而かも支那大陸に活躍する勇士のそれに比し甚だ華やかならざる場面に思を致せば轉々同情哀悼の意を表せざるを得ぬが併し不逞の匪賊は今次聖戰を期して滿洲國の擾亂と皇軍の背後を脅威せんと企てたので支那事變と密接不可分の一元的事象と考察して差支なく又他面對ソ關係の尖鋭化しある當時の狀況に想到すれば氏の功績赤燦として皇軍戰史を飾り芳名を不朽に傳ふべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家特に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　平田忠夫

沈着豪膽なる小銃手、東邊庄の苦戰に奮鬪して職に殉す（兄弟出征）

氏は岡山縣淺口郡船穗村の人にして父を吟太郎母を菊野と云ひ大正七年十月二十八日に生れ未だ獨身であつた。性溫和謹直孝心極めて深く又義務心に富み事に臨みては剛毅果斷であつた。昭和八年三月船穗小學校高等科を卒業し其後家事を手傳ひつゝ同村公民學校へ通學し同十年七月同村青年學校本科三年に編入せられ引續き在學して入營時に及んだ。氏は幼より軍人たる事を好み適齡を待たず現役志願兵として昭和十二年一月岡山歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

支那事變起るや間もなく赤柴部隊に屬し杉田中隊の小銃手として勇躍北支戰線に向ひ出征した。北支到着以來所屬大隊は降雨泥濘に惱まされつゝも津浦線に沿ひ南進し八月二十一日午後三時より先づ畢庄子の敵を一蹴し續いて徐庄子の敵を擊破して翌二十二日東邊庄附近の敵を攻擊する目的を以て午前三時行動を起すや氏は尖兵小隊內に在りて所屬中隊の前方二百米を前進し逐次敵陣地に近迫したが敵は巧に遮蔽陣地を占領し目標の發見極はめて困難であつた。所屬中隊は大隊の左第一線となり氏は中隊の右第一線小隊內火線分隊員として午前十時二十分より攻擊を開始したが敵は此時十數銃の重機關銃の外自動小銃及び重輕迫擊砲を以て一齊に火蓋を切り猛射を浴びせて來た。我が方は當時砲兵も歩兵も未だ來着せず刺さへ擲彈筒手榴彈の彈藥補充も意に委かせずして遺憾乍ら所屬大隊は死傷續出し攻擊鼓に頓挫するに至つた。所屬大隊長は已むなく戰線を整理し日沒を待ち攻擊を再興するに決した。時正に午前十一時過である。敵は得たりと更に壓倒的の銃砲火を集中し來り其優勢なる兵力を利用し先づ我が

左翼に次で右翼に向ひ潮の如く殺倒し大規模の逆襲を行ひ來り大隊は正に累卵の危機に直面した。此時氏は豪膽沈着適切有效なる射撃を以て數多の敵を殺傷し遂に敵の逆襲部隊を撃退するを得た。日沒頃より敵は益々増援隊を得たるものゝ如く其火力は愈々熾烈となつた。玆に於て所屬大隊長は兵力を集結し夜襲を決行せんとしたが戰場の高粱畑と泥濘地帶に妨げられ折柄月亦暗雲に掩はれて指揮連繫頗る困難なりし爲拂曉を期し攻撃再興に決心を變更した。此夜敵は幾度か逆襲に轉じて來たが氏は克く奮闘し敵に多大なる損害を與へて之を撃退し又沈着正確なる狙撃に依り活動中の敵を制壓する等旺盛なる攻撃精神を發揮したが午後十一時三十分愴くや敵の迫撃砲彈身邊に落下炸裂し氏は爲に右方腰部に爆片創を受け壯烈なる戰死を遂げた。然かし所屬大隊は氏等の勇戰奮闘に依り敵の企圖を完全に破碎し更に二十三日黎明に至り大隊砲の増援と機關銃隊の掩護射撃の下に殲滅的の大打撃を與へて敵陣地を奪取し以て靜海附近に於ける敵陣地帶中最右翼の鎖鑰に一大脅威を與へ敵主力をして總退却の已むなきに至らしめた。

氏の實兄染一上等兵も今次聖戰に出征中であるが氏の訃報に接したる兩親は「御國の爲に聊かたりとも働いて死んで呉れました事は軍人としての本望でせう。あれも志願して行く位ですから既に家族も本人も一切を覺悟してゐましたが本人としては今少し働きたかつた事と思ひます。此上は皇軍の武運長久と幹の冥福とを祈つてゐます」と健氣に語つたと云ふ事である。斯かる忠良なる父母の膝下に育まれ又軍隊教育に依り更に心身を玉成せる氏は果然慘烈なる戰況に遭遇するや冷徹果斷唯々君國の爲全靈全身を捧げて勇戰奮闘し所屬部隊戰勝の尊き礎石をなしたるに止まらず實に津浦線作戰の重大關門の突破に貢献せるものであつた。あゝ斯かる有爲忠勇の士を喪へるは轉た痛惜に堪へざるも人は一代名は末代で短き現世の壽命以外に尙永世の大生命のある事を知らねばならぬ。氏の赫々たる功績は正に皇軍戰史に牢記せられ又大生命を授けられて護國の神と仰がるるに至つた。今や其壯容に接すべからずと雖も昭々たる神靈は尙も皇國を守り又一家の守護神として遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　平野辰雄

勇敢なる小銃手、負傷に屈せず手榴彈を投擲しつゝ敵主陣地攻略に玉碎す「安仁街」

氏は鳥取縣日野郡根雨町大字板井原の人にして亡父を常治母をちよと稱し大正四年十月四日を以て生れ未だ獨身であつた。大正十一年四月板井原尋常小學校に入學昭和三年三月卒業更に高等科へ入學の希望を有せしも父に死別せる爲之を斷念し家庭に在つて農業に從事し傍ら勞働に從事し幼少の身ながら精勵克く一家の柱石となつて居た。資性溫順にして而も快活曾て人と爭ひたることなく父亡き後は母に仕へて孝養最も厚く弟妹を勞はり又友愛心に富み他人の爲めに謀つて勞を厭はず鄕黨皆其の人と爲りを讃へざるはなき有樣であつた。斯くて昭和十一年一月徴兵として松江歩兵第六十三聯隊に入營し熱心精勵一等兵に進み翌十二年七月除隊の眞際に支那事變勃發し在營延期の上福榮部隊に編入せられ間もなく北支方面の征途に就いた。やがて津浦沿線の戰闘に氏は中隊の右第一線たる第三小隊第一分隊小銃手として九月三日夏庄の敵を攻撃し敵火の下勇敢に奮戰遂に小隊長と共に敵陣に突撃して夏庄を占領し九月五日には中隊の豫備隊として燒窰盆の敵を攻撃し十一日には馬廠河附近の殘敵を掃蕩したる上泥濘膝を沒する難路を前進し十七日小劉金庄を占領した。斯くて二十日李家場頭の攻撃には第一線に在つて攻撃前進し遂に分隊長と共に勇敢に敵陣に突撃之を占領したが敵は更に逆襲に轉じて來た。此時氏は沈着正確なる射撃を以て敵に多大の損害を與へ其功績頗る大なるものがあつた。次いで二十七日より敵

を追撃して德縣に向ひ同地攻撃に參加し更に十月十三日より十四日に亘る平原城の攻撃に於ては十三日夜阿堂を夜襲し小隊長と共に勇敢に突入同地を占領し翌拂曉平原城の攻撃には猛烈なる敵の銃砲火を冒し一進一止敵に近迫し遂に鐵條網を超越し地雷埋設の地區を突進して平原城北門より突撃して遂に之を占領した。當時に於ける氏の勇戰奮鬪振りは誠に目覺しきものがあつた。次いで十一月黄河北岸掃蕩作戰に加はり氏の中隊は十三日午後八時半頃より安仁街附近の敵を攻撃した。此の時氏は松原准尉の指揮する第三小隊に屬し小銃手として猛烈なる敵火を冒して勇敢に前進し中隊は敵に近迫して玆に猛烈なる射撃を浴びせ遂に中隊長は薄暮を利用して突撃敢行の命令を下した。此の時小隊長の傍にありし氏は自ら進んで傳令となり敵彈雨飛の中を勇敢機敏に行動し各分隊長に突撃に關する小隊長の命令意圖を傳達した。而して其突撃に當りては小隊長に從ひ勇敢に突入し小隊が其第一線陣地を占領するや氏は獨斷進んで各分隊と連絡して小隊長の掌握を容易にし次で小隊が更に敵主陣地に突撃を決行するや氏は此の時敵彈を受け負傷したるも屈せず手榴彈を投擲しつゝ前進し遂に小隊は目指す敵主陣地の一角を占領したが其刹那敵機關銃の爲め氏は小隊長以下十數名と共に壯烈なる戰死を遂げた。

氏や敵彈雨飛の裡率先決死的傳令の任務に當り小隊長の命令を各分隊長に傳へ以つて小隊突撃奏功の因を作り更に突撃に際しては身既に負傷しながら手榴彈を投擲しつゝ突入して小隊長と共に敵彈に斃る。其の壯烈勇敢正に皇國軍人の龜鑑である。所屬中隊の清水少尉は後ち遺族に書を寄せ其末尾に附言して曰はく「町長始め町民諸子よ平野の勇敢なる戰死を讃へて遺つて下さい彼の死は根雨町民として面目を汚さぬ立派な戰死であつた」と。

敢えて言ふ氏の最後や實に根雨町民としてのみならず皇國軍人の面目を發揮したる烈々たるものにして其勇名は拔群の功績と共に永く聖戰史上に芳薫を放つであらう。

噫、孝悌仁慈の士今や護國の神となつて不滅に生き皇國を守護すると共に母の餘生弟妹の將來に强き力と福祉を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　樋口德太郎

敵火の中に傳令の重任を完うして斃る

氏は新潟縣南魚沼郡大崎村の人にして父を辰太郎母をクマと稱し大正五年一月十六日生れで未だ獨身であつた。昭和三年三月大崎尋常小學校を卒業し同村青年學校に入り昭和十一年十二月本科課程を卒業した。翌十二年一月徴兵として高田步兵聯隊に入營同年四月滿洲に派遣せられ當初伍常に後はハルビンに移駐し同年七月步兵一等兵に進級した。昭和十二年七月支那事變勃發するや八月猪鹿倉部隊林中隊第二小隊擲彈筒彈藥手として北支に出動し九月三日より四日に至る天鎭附近の戰鬪に於ては氏の中隊は三日午前九時行動を開始し翌四日拂曉より敵の警戒陣地を攻撃し遂に午前八時三十分之を奪取した。當時氏は小隊長傳令として終始小隊長の傍らにあり敵火を冒して連絡通報の任に當り突撃に際しには小隊長と共

に勇敢に敵陣に突入した。斯くて敵警戒陣地を奪取した小隊長は氏に小隊の現況並に小隊前面の敵情を中隊長に報告する事を命した。當時警戒陣地より退却した敵は其本陣地に據り我に向つて盛に銃砲火を浴びせて居たが氏は此重任を命ぜらるゝや勇躍敵の猛火の中を疾驅して約五十米を隔てし中隊長の許に至り仔細に報告し再び猛火を冒して將に小隊長の所に達せんとせる刹那敵の一彈は氏の上膊部を貫通した。然かし剛毅の氏は直ちに止血繃帶して小隊長の許に至り逐一復命した。而して中隊長は氏の傳へた小隊長報告に依り當面の敵情及部下小隊の情況を知悉するを得午後三時四十分敵の前進陣地に突入を決意し後飛行機の協力に依り之を奪取し多數の敵に大損害を與へ所屬部隊爾後の攻擊に至大なる利益を與ふるに至つた。氏は小隊長に復命後戰友に對し「殘念だ右手をやられた」との言葉に戰友は氏を壕内に入れて更に手當を施し後送したが動脈を切斷され出血多量なりしと連日の疲勞とに依り手厚き加療看護も其效なく九月五日夕陽將に西山に沒せんとする午後五時三十分竟に北支戰線の華と散つた。

氏は在隊間の成績優秀にして諸事熱誠志氣亦澄刺衆の模範として愛敬を受けて居たが聖戰に參加するや益々其の眞價を發揮し上下の信頼を集めありしに聖戰の半ばにして玉碎せるは惜しみても尙餘りある次第である。さり乍ら氏の功績は皇軍北支戰史に牢記され其の名は千古に芳ばしく其の英靈は不滅に生き尙も皇國並に一家の守護神として活躍する事であらう。あゝ夫れ人生死所を得るや寔に難し而して氏は職責のある所水火も辭せず任務の命ずる所劍電彈雨の中に天晴れ犧牲的精神を發揚し竟に崇高にして永世の生命に生くるを得たるは正に武人の龜鑑となすに足るものである。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　森　金太郎

忠孝一途の士、克く奮戰して惜しくも大册河畔に散る

氏は栃木縣上都賀郡足尾町の人にして父を榮太郎母をハルと云ひ明治四十五年五月十三日に生れ妻美佐子との間に未だ兒はなかつた。責性溫良にして事に當りては熱心且積極勇敢であつた。氏は亦兩親に仕へ頗る孝行にして極めて圓滿なる家庭を營んでゐた。昭和二年三月古河足尾銅山高等小學校を卒業し其の後直ちに米澤市藤電氣會社に入り勤續すること二年歸鄕の上足尾銅山に入社製煉係として亞砒酸工場に於て勤務してゐた。。昭和八年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊留守隊に入營直ちに滿洲に派遣せられ逐次綏中、彰武、通遼、齊々哈爾、泰安等の警備に任じ此の間四月一日には石門砦附近の戰鬪に、十月九日より十一月二十八日に亘りては吉林省秋季討伐に、翌九年二月七日より二十七日に亘りては黑龍江省殘匪討伐に參加し以て滿洲治安工作に貢献せし所勘からず其の功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり昭和九年五月內地に歸還し七月善行證書を附與せられ歸休除隊した。其の後鄕土の青年會幹事として會の發展に盡瘁貢献せる所多く又柔道は初段にして戰死後二段に追陞せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第二中隊に編入せられ第一小隊第四分隊小銃兵として勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十三、十四日は楡坐鎭南方永定河々畔の戰鬪に、十五、十六日は拒馬河々畔の戰鬪に、十八日は北義

安の戰鬪に參加し何れも克く奮戰して逐次敵を擊退し續いて追擊に移り二十一日中隊は尖兵中隊となり前進し下柴口南方高地に差懸るや突如敵の猛射を受くるに至つた。尖兵中隊は直ちに展開して此の敵を攻擊するや氏の小隊は第一線となり氏は火線に於て沈着勇敢に正確なる射擊を以て敵を制壓しつゝ躍進を續け逐次敵に近迫し愈々突擊命令下るや率先して急峻なる高地斜面を駈け登り猛然小隊長と共に敵陣に突入し遂に敵を擊退するに至つた。次で機を逸せず之に尾して急追し大冊河左岸舫上部落に近づくや再び敵の抵抗を受けしが追擊の餘勢を以て勇猛果敢彈雨を冒して敵前百米にまで進出し沈着正確なる射彈を敵に浴びせ敵兵動搖の色あるや小隊長の突擊號令に再び敢然突入し午後六時遂に同部落を占領確保した。當時將兵一同は連日の惡路急追擊と食糧缺乏の爲め疲勞困憊極度に達せしも目指す保定攻略の爲め衆心一致意氣正に天を衝くばかりであつた。而して對岸の敵は永年に亘り堅固なる數線の陣地を構築し鐵條網戰車壕を繞らし掩蓋機關銃座を設備し加ふるに大冊河は腰を沒する濁流にして敵は此の天然の障碍を利用して我を進擊阻止せんとしてゐた。かゝる堅陣に對し晝間の攻擊は徒らに損害を多からしむるを以て坂西部隊長は夜襲を以て攻略するに決し直ちに之が準備に着手した。此の時中隊は王谷莊堡附近渡渉點確保の命を受けて夕刻其の任に就くや氏は分隊長指揮下に熾烈なる敵火の下に警戒兵として立ち克く敵情を監視しつゝ其の任を完うした。斯くして愈々其の夜午前二時半より中隊は大隊の右第一線として王谷莊堡北側陣地に對し夜襲の爲め行動を起した。一同は舊曆十七日の月明を背に決死大冊河を渡渉し鐵條網を破壞しつゝ猛火を冒して前進し終に突擊に移りしが此の時氏は率先勇猛果敢に前進中無念午前四時頃敵前至近の地點に於て機關銃彈の掃射を受け頭部に貫通銃創を蒙り竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。而して中隊は本戰鬪に於て戰死二十九名戰傷中隊長以下六十五名の多數を出し惡戰苦鬪を續けたるも氏等の勇戰奮鬪により遂に午前十一時完全に此の要點たる敵陣地を占領することを得た。

夫れ忠孝は一道なり氏の鄕に在るや至孝出でゝ戰陣に臨むや彈雨の下每戰勇猛果敢殊に滿洲事變歷戰の勇士として常に分隊の中堅となり率先奮鬪克く兵の本分を完うし中隊の戰力を發揮せしめて遺憾なかつた。是れ一に氏が盡忠至誠の發露にして斯かる忠孝の勇士を聖戰の初期に喪ひしは惜しみても尙餘りある次第である。然かし氏が拔群の武功は皇軍戰史に鮮き累次の聖戰に參加して興亞の礎石となりたる赫々の功績は將來五族の景仰措かざるべく其の英魂は不滅に生き護國の神となりて尙も皇猷を扶翼し奉ると共に亦一家の守護神ともなり老親妻女の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　森本伍一

忠孝一途の模範機關銃手、屢々戰勝の端を拓く

氏は兵庫縣養父郡大藏村の人にして亡父を權之助母をちよと云ひ大正五年七月二十四日生れで未だ獨身であつた。資性溫厚誠實至つて淸き心の持主で親に對しては孝養至らざるなく又弟を愛撫し一村の推賞措かざる所であつた。十五歲にして父を喪ひ高等小學校卒業後は一家を支ふる爲め直ちに市場村平山牧場に入り爾來氏は二十三、四人の雇傭人の中堅とな

り終始一貫至誠勤勞模範青年として場主の信用頗る厚く又其の多忙の間寸暇あれば讀書及修養に努むる等克く奮勵自ら向上に努めてゐた。又氏は堅忍持久の人にして動員下令以來は如何なる困苦疲勞の日と雖も一日として缺かさず戰死當日の朝まで日誌を認めてゐた。

昭和六年三月大藏尋常高等小學校を卒業したが在校八ヶ年間學術操行共に優秀同校隨一の模範生であつた。其の後前記の牧場に勤め入營時に至つた。昭和十二年一月徵兵として鳥取歩兵聯隊に入營し爾來軍務に恪勤精勵し學術優秀同年七月第一回に精勤章を附與せられ且一等兵に進級した。

昭和十二年七月支那事變起るや長野部隊に屬し第一機關銃隊に第四分隊三番銃手として八月勇躍征途に就いた。北支戰線到着後家鄉に書を送りて曰く「戰爭は眞劍に命の取合ですからねー、今更云ふまでもありませんが命を捧げて戰場に來た自分ですから御國の爲めに有らん限りの力を盡す覺悟です。我れに萬一の事があつても母樣決して泣いたりなどして下さいますな。能く死んで呉れた母も滿足だと褒めて下さい。明日の命も知れない我等今は全くほがらかです。姉樣母樣を大切にして上げて下さい賴みます。唯一人の母上ですからね。弟も元氣を出して一生懸命勉强するのですよ。兄は御國の爲めに立派に盡す覺悟だから御前は母上に十分孝行をして下さい。此の兄の分も一所に賴むよ」と洵に氏の孝心と決心の程が偲ばれてゆかしき限りである。斯くて九月七日より十二日に亘る馬廠附近の戰鬪に際しては氏の分隊は流河鎭攻擊部隊たる第三中隊に配屬せられた。然るに

敵は流河鎭西方堤防上に設備せる側防機關銃より猛射を浴びせ來り第三中隊は之に應戰大に努めたるも頑强に抵抗し敵火衰へず爲めに意の如く攻擊は進捗しなかつた。此の時機關銃分隊は彈雨を冒して第一線に進出し氏は勇敢沈着精度良好なる猛射を加へて忽ち之を制壓し遂に第三中隊をして流河鎭に突入することを得しめた。而して第三中隊が流河鎭部落に進入するや敵は猛烈なる勢を以て逆襲し來りしが此の時亦氏は沈着機を失せず逆襲部隊に猛火を浴びせ多大の損害を與へて遂に敵の企圖を挫折せしめ敗退の已むなきに至らしめた。續いて九月十三日より滄縣附近の戰鬪開始せらるゝや第三中隊は十七日早林庄の敵を攻擊した。此の附近一帶は出水の爲め首を沒する狀況にして我が攻擊は頗る困難を極はめしが機關銃分隊は此の困難を冒し敵の左側に迂回して敵の側背に進出した。氏は何時もの如く沈着正確に此の敵に猛烈なる斜射側射を加へ敵をして遂に潰滅に陷らしめ第三中隊の早林庄占領に寄與する所頗る大なるものがあつた。

次いで九月二十二日午前四時頃第三中隊は人合庄の占領を命ぜらるゝや機關銃分隊は猛烈なる敵火を冒して適時適所に進出し直ちに射擊準備にかゝりしが氏は周到なる用意の下に敵の意表に出でゝ猛射を加へ敵をして北部人合庄より退却するの已むなきに至らしめ第三中隊をして先づ之を占領し午前十一時三十分頃には該部落の掃蕩を終るを得しめた。續いて午後五時頃第三中隊と共と南部人合庄の北端に進出し次の攻擊準備に着手した。而して午後五時五十分頃聯隊砲中隊は姚官屯驛の敵砲兵陣地に對し射擊を開始せしが敵も亦午後六時頃熾に銃砲彈を南部人合庄附近に注いで來た。此の間機關銃分隊は寸暇を利用し爾後の戰鬪に喫緊缺くべからざる銃の手入に沒頭中午後六時三十五分姚官屯方向よりする敵砲兵の集中射擊を蒙り其の一彈は銃側一米附近に落下炸裂し氏は惜しくも左側頭部に其の砲彈破片創を受け竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏や家に在りては至孝、其の出でゝ軍に從ふや所謂親に孝ならんと欲せば須らく君に忠なるべしと、滅私奉公身命を君

國に捧げ覺れて後已むの決意牢固たるものがあつた。果せる哉其の忠誠の迸る所每戰彈雨の下射手の重責を負ひ剛膽沈着或は精密正確なる射擊となり或は急襲鐵槌的射彈を送り以て皇軍機關銃の精鋭を發揮して遺憾なかつた。孝より出でゝ忠となり良民より崗でゝ良兵となる眞に軍民の鑑と謂ふべきである。聖戰中途氏の如き忠勇の士を喪ふ痛恨禁ぜずと雖も其の赫々の武勳は千載に輝き忠孝一途良兵良民の示範は萬古に流れて盡きざるべく不滅の英魂は護國の神となり出でゝは興亞の前途を守護し入りては老母の多幸を加護して已まぬであらう。

因に老戰友氏を弔ひて「君が爲め花と散りけり我友は親にも孝の實をはのこしつ」と嘆賞した。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　森山武

模範的擲彈筒彈藥手、大册河畔黃村攻擊に玉碎す

氏は長野縣下高井郡日野村の人にして父を利政母をきくのと稱し大正五年十二月十八日生れで未だ獨身であつた。資性溫順にして情誼に厚く不言實行剛毅果斷の人であつた。昭和六年三月日野小學校高等科を卒業し續いて實業補習學校に入り昭和十年三月卒業し同年九月日野青年學校の開設せらるゝや直ちに之に入校熱心勉勵して翌十一年には現役志願を爲し採用せられて十二年一月松本市歩兵聯隊に入營した。

支那事變起るや昭和十二年九月遠山部隊に編入せられ齋藤中隊小池小隊に屬し擲彈筒彈藥手として勇躍北支方面への征途に就いた。北支に上陸するや休む暇もなく所屬隊は難行軍の後九月十六日南泊附近の敵を破り之を追擊して十八日涿縣を占頗した。當時氏は克く困苦缺乏に堪へ危險を顧みず或は斥候として或は歩哨として克く任を完うした。

所屬部隊は續いて大册河の線に向つて前進し九月二十一日より同河畔黃村附近の敵陣地を攻擊することゝなつた。大册河は河幅八九十米水深一米五十内外にして敵は其の對岸地區に長時日を費し三線配備の堅固なる陣地を構築し難攻不落と誇つて居たのであつた。敵前渡河攻擊の準備を完了した所屬遠山部隊は二十一日の夜十一時より行動を起し氏の屬する加島大隊は第一線となり齋藤中隊は其左第一線小池小隊は更に中隊の左第一線であつた。當夜は月夜にして我が軍が行動を起すや敵は早くも發見して迫擊砲機關銃の射擊を浴びせて來たが一意前進遂に河岸に達し大册河の渡河を敢行した。氏等擲彈筒分隊は機關銃と共に對岸の敵を猛射猛擊して我が軍の渡河を援護したる後敵岸に渉り一早く筒を据へ敵陣地に猛擊を加へた。而して我が部隊が敵岸に渉り攻擊前進するや敵は必死の抵抗を爲し其の銃砲彈は篠突く霰の如く爲に我が死傷續出するに至つた。。然かし中隊長以下益々勇を鼓し一進一止敵に近迫した氏は此の苦境の間に克く分隊長を輔佐し常に

我が射擊を觀測して射手をして有效なる射擊を爲さしめ又敵情に注意し適時有利の目標を分隊長に報告する等其の勇敢熱誠なる活躍振りは第一線兵の範とするに足るものであつた。尙氏は周到にも常に彈藥に注意し分隊の射擊に支障なからしめんと其の補充に努めた。斯くして二十二日午前七時稍々前氏の小隊は敵陣地に肉薄し小池小隊長は屢々突擊を敢行せんとするや忽ち小隊正面に敵重機關銃現れ物凄く銃口より火を吐き出した。小隊長は直ちに氏の分隊と輕機關銃分隊に之が

制壓掩護射擊を命ずると共に小隊は小池准尉陣頭に立つて敢然突擊し遂に黃村の一角を占領し土壁上高く日章旗を樹てた、之を見た氏の分隊及輕機關銃分隊は小隊に追及すべく前進を起した其の刹那敵の迫擊砲彈は分隊の所に落下炸裂し無念にも一度に數名死傷し氏も又頭部腹部腰部に爆創を受け竟に壯烈なる戰死を遂げた。而して此の戰に氏の中隊は中隊長齋藤勝司氏以下多數の死傷を生ぜしも黃村陣地は遂に其の日を以て奪取確保したのであつた、因に氏の小隊長小池准尉も亦其の後の戰鬪に壯烈なる戰死を遂げた。

氏や誠實溫順情誼に厚く不言實行的の人にして向學心に富み大に將來を囑目せられて居たが北支戰線に立つて僅かに二旬早くも華北の華と散る。洵に痛惜哀悼の情に堪へない。然かし士の戰場に臨むや元より生還を期せず而かも士は百戰功なき瓦全を耻ぢ一戰玉碎功を奏して名を遺すに如かず。氏が出征以來殊に大冊河畔黃村攻擊に於ける奮戰活躍は我が軍戰勝の素因を爲せるものにして其の赫々たる武勳は皇軍戰史に牢記せられ芳名は千載に謳はれ其の英靈は不滅に生き護國の神と祀られ神靈は永へに皇國を護り又其の兩親一家の上に尊き加護を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　茂木幸平

寡默高潔の勇士、決死彰德城に突入奮鬪して玉碎す

氏は群馬縣利根郡桃野村の人にして大正五年二月十一日生れである。父を柳太郎母をかめじと云ひ未だ獨身であつた。資性寡默人格高潔同輩の尊敬を受けてゐた。昭和四年三月桃野尋常高等小學校を卒業同十一年十二月桃野實業補習學校を修了した。昭和九年より他家にありて農業に從事し一意專心克く精勵して居たが後昭和十二年一月徵兵として高崎步兵聯隊に入營在隊日尙淺かりしも射擊優秀にして賞狀を授與せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月十四日森田部隊に屬し勇躍征途に就き北支上陸の上九月十四日永定河畔殷家舖門村附近の渡河戰鬪を初めとして十五日は拒馬河畔東茨村の渡河攻擊に、十六日は平漢沿線望海莊附近の殘敵掃蕩戰に、十七日は東順頭附近の晝間攻擊及夜襲に、十八日より二十日に亘りては高里店姥村附近の追擊戰に、二十一、二日に大冊河の渡河掩護、黃村近の攻擊に、二十三、四日は保定附近殘敵の掃蕩戰に十月に入りては一日より三十日に亘り石家莊、元氏、順德、磁縣、豐安等逐次南下追擊しつゝ或は渡河戰に或は掃蕩戰に或は彈雨の下危險を冒して斥候の重任を果たす等休まる暇もなく惡路嶮難を冒し飢餓に堪へ每戰分隊の先頭に立ち勇戰奮鬪克く其職責を完うした。

十一月愈々彰德城の攻擊となるや明治節の佳辰を期し敵に近迫した所屬中隊は三日夕刻夜襲に依り先づ彰德西方二粁の部落を奪取し四日は午前六時三十分行動を開始し目指す彰德城に肉薄した。然るに城壁は高く城門前には鐵條網外壕を廻らし且城壁上より小銃機關銃手榴彈を猛射し步兵獨力にては到底奪取することは困難であつた。驕て重砲兵の突擊準備砲擊は開始せられ次で工兵の城門爆破となつた。大隊は第十一第九中隊を第一線とし氏の所屬中隊亦第一小隊を第一線とし決死隊を編成して西門を奪取することゝなつた。愈々突擊の機熟するに至り決死隊先づ城門に突入するや氏の屬する第三分隊亦殆んど

之と同時に突入した。此時氏は雄心勃々決死隊の突入を看過し得ず敢然として分隊の先頭に立ち鐵條網を超え將に城門に入らんとせる刹那右方城壁上より猛射を受け惜しくも大腿部に數彈の貫通盲貫銃創を蒙り無念戰車壕に墜落悲壯なる戰死を遂ぐるに至つた。併し四、五分の後には氏の所屬小隊は西門に一番乘りして城樓高く日章旗を樹つることを得た。時正に午後一時三十分であつた。

氏の戰場に立つや每戰勇敢其職責を果たし殊に彰德の堅城に迫るに及び敢然決死分隊の先頭に進んで突入す。中途不幸身は敵彈に斃れしと雖も氏が勇魂は城頭高く先驅して敵を震駭せしめたであらう。間もなく小隊が一番乘りの榮冠を贏ち得たるは宜なりと謂はねばならぬ。氏や鄕に在りては近隣尊敬の的となり軍に從ひては決死奮鬪斃れて後已む。誠に良民良兵の鑑と謂ふべきである。氏今や亡しと雖も京漢線上行旅の人々暫し彰德城外肉彈橋に足を留め當時の激戰を偲び赫々の武勳を讃へ忠魂を弔ふて已まぬことであらう。又氏の英魂は護國の神として不滅に生き皇國を守護し遺族に佑を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級　森下行吉

忻口鎭軍艦山敵の側防機關を爆破し戰勝の端を拓く

氏は兵庫縣宍粟郡繁盛村の人にして父を信太郎亡母をきくと稱し大正四年十一月十五日生れで未だ獨身であつた。資性溫厚篤實寡默實行の人で孝行息子の名と共に近隣の風評良好であつた。昭和二年四月繁盛小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在つて父を助け專心家業に勵んで居た。昭和十一年一月徵兵として岡山工兵隊に入營し同年五月支那駐屯軍工兵隊に派遣せられ北支に於ける我が權益居留民の保護に任じて居た。

昭和十二年七月七日突如蘆溝橋事件勃發するや我が北支駐屯軍は直ちに出動準備を爲すと共に隱忍自重之を平和的に解決すべく努力したが支那軍の傲岸なる挑戰に終に堪忍袋の緖を切つて膺懲することになつた。而して氏の所屬武田小隊は七月二十七日通州の我が駐屯部隊に屬し同地駐在の支那第二十九軍第三十九旅の一營を攻擊し翌二十八日には石溜莊附近に於て南苑攻擊に參加し更に翌二十九日に苑平縣城を攻擊占據した。其の攻擊の際氏は第二梯子班に屬し雨下する敵火を冒して勇敢機敏に苑平縣城壁に梯子を架し突擊路を開設して步兵の突入を容易ならしめた其の功績は偉大なるものであつた。斯くて蘆溝橋苑平縣城占據後は酷熱降雨泥濘を冒して連日連夜道路の補修開設作業に從事し八月中旬より北平に移り同月下旬以降は俘虜約三百名を以て工程隊を組織し飛行場及道路等の補修構築に當らしめ氏は此の工程隊一部の指揮指導を命ぜられた。當時敵の敗殘兵や匪賊便衣隊は日夜出沒し其間に俘虜の使役は頗る危險且困難なるものであつたが氏の指導宣撫適切なりし爲大なる成果を擧げた。其の後十月中旬所屬大賀部隊は萱島支隊に配屬せられ平綏線に沿ひ山西省忻口鎭に向つて前進し二十三日敵の第一線を距る約二吉米の南懷地に達し玆に息つく暇もなく斥候に選ばれ忻口鎭西北方軍艦山附近敵陣地の偵察を命ぜられた。氏は勞苦を顧みず勇躍危險を冒して克く斥候長を輔佐し無事其の任を果たして歸還し

斥候長をして有利の報告を爲さしめた。斯くて萱島支隊は二十四日正午より軍艦山の敵陣地に向つて攻撃を開始した。敵は精鋭を以て誇る共產軍及中央軍にして其の陣地は天險を利用し數線に重疊して頗る堅固に構築せられ頑强に抵抗し爲に我が攻撃は意の如く進捗せず特に墓地の高地兩端突角部にある側防火器の爲我が第一線は死傷續出して爾後の前進は殆ど不可能の狀況になり萱島支隊長は日沒後破壞班を以て敵の側防機關を撲滅して突撃を決行するに決し氏は此の時選ばれて破壞班に加はり日沒後出發した。然るに敵は晝間に於ける我が猛攻に對し增援隊を得たるものゝ如く午後八時頃より數次に亘り逆襲し來り爲に彼我混戰亂鬪一大修羅場と化したが遂に敵を撃攘した。支隊長は直ちに部隊を整理し彈藥を補充し更に午後十一時半敵の側防機關を破壞して突撃する事に決した。此の時氏は小隊長以下七名より成る第二破壞班の爆藥手となり小隊長に從ひ決死敵の側防機關銃陣地に肉薄し火を吐く敵の機關銃に向ひ爆藥手榴彈を投じ其の炸裂爆音は夜暗天地に轟き同時に歩兵部隊は勇猛果敢敵陣に突入し奮戰格鬪遂に軍艦山の一角を占領した。而かも徹宵翌二十五日に亘り勇戰奮鬪して戰果の擴張をも續けた。然るに午後一時三十分頃惜しくも氏は胸部及膊部に貫通銃創を受けて倒れた。氏は直に急救所置を施され衞生班に收容治療を加へられたが其の甲斐もなく翌二十六日午前五時忻口鎭の華と散つた。而して我が軍は氏等の奮戰と尊き犧牲に戰勝の端を拓き更に激戰を續くること十日間遂に十一月三日明治節の佳辰に堅壘を陷れ忻口鎭の城頭高く旭旗を飜すに至つたのであつた。

氏郷に在つては孝行息子と呼ばれ家業に勉勵し戰場に立つや剛毅堅忍あらゆる辛酸困苦を克服し危險を顧みず自己任務に邁進し殊に軍艦山攻撃には苦戰の間に剛膽挺身敵の側防機關銃に爆藥を投擲して之を撲滅し以て我が歩兵の突撃を容易にし戰勝の端を拓きたる其の功績は正に拔群であり又工兵の鑑とするに足るものである。今や斯の如き勇士を喪ふ洵に痛惜の極みである。然かし氏の武勳は赫々として靑史に輝き英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇猷を扶翼し奉りいとしき父に加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　鈴木傳一郎

至孝誠忠の士、元氏攻撃に奮戰して院家村の華と散る（孝子美談）

氏は栃木縣那須郡七合村の人にして父を傳吉母をアキと云ひ大正三年三月十九日に生れ未だ獨身であつた。資性質朴にして勤勉不屈不撓の氣慨を有し殊に親に仕へて從順至孝の人であつた。家貧なりしが爲め里餘の通學は常に藁草履を用ひ雨天の日は徒跣であつた。或る祝祭日に母は今日丈けはと親心に下駄の緒を造り古下駄を搜し集めしも左右揃ひしものなく母は之ではと困惑せるに氏は「之でよい。大は親、小は子、今日は親子揃つて登校するのだ」と勇みて左右不揃ひの下駄を履いて登校した。童心ながら家の貧なるを知り親に心配をかけまいと努めてゐた其の心根はいぢらしくも哀れである。又或る日母と共に田の畦作りを爲し居たるに母の投げたる泥土の跳ねがはしなくも氏の顏にあたり氏は顏中泥塗れとなりしにより母は泥丈けにても洗ひ落せと言ひたるに氏は「お母さんの下されもの難有いから」と一言も返し言をせず喜々として其の儘に爲して居た。氏はかくの如く親に從順なりしのみならず親の恩には常に感激してゐた。長ずるに及び農事に頗る熱心常に土間に黑板を掲げ行事豫定肥料配合等を詳細に計畫記入し其の通り確實丹念に實行し眞に二宮尊德翁の報德實行者であつた。氏を多年敎育したる小學校々長の弔詞に於て「君こそ忠節禮儀武勇信義質素の五ケ條を至誠を以て躬行したる者である云々」と述べたるに列席の村民一同は是こそ寔によく本人の性質を言ひ現はしたる言葉なりと互に謂ひ合

つた程であつた。昭和三年三月七合尋常高等小學校を卒業し其の後青年訓練所に入所し同九年一月其の課程を修了し同十年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營した。入營後氏が如何に軍務に誠實勤勉なりしかは在隊間精勤章を受くること實に三回に及びしに徴しても明かである。斯くて十一年七月善行證書を附與せられて歸休除隊し其の後家業に精進の傍ら在鄉軍人分會役員青年團役員及消防手として會及團の向上發展に盡瘁し亦其の他の公共事業に貢献せし所尠くなかつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第十中隊に編入せられ第三小隊第二分隊小銃手として勇躍征途に就いた。北支戰線到着後氏の小學校に送りし書面の一節に「小生も日本男兒の面目を恥かしめぬ覺悟、七生報國の大決心にて相勵み申すべく」とあつた。斯くて所屬中隊は九月四日より十五日まで秦皇島附近の警備に任じ同月十六日同地出發連日泥濘惡路の强行軍を續け終に將兵一同疲勞困憊せるも互に激勵相扶けて前進を續け此の間氏は屢々斥候として又夜間歩哨として萬難を排し困苦に堪へ誠實其の任を完うして中隊の保定集結に遺憾なからしめ更に十月一日よりは再び困苦と缺乏を忍びつゝ八日間に亘り數十里の難行軍を克服し遂に八日中隊は滹沱河々畔に達し鼓に搜索據點を占領して渡河攻擊準備の爲め敵情地形河川の偵察に努めた。此の時氏は連日の疲勞困憊にも拘はらず不屈不撓積極的に活躍し各種の困難なる偵察任務に服し以て中隊の任務達成を容易ならしめた。

斯くて中隊は十月十一日同地を出發し元氏に向ひ殘敵を追擊して前進した。然るに途中敵は院家村附近に陣地を占領し我が前進を拒止し中隊は直ちに展開して之を攻擊し逐次敵に近迫した。氏は此の間分隊長の指揮下に篠つく雨の如き敵彈下を冒し率先勇敢躍進に躍進を重ね其の停止に當りては沈着克く正確なる射擊を爲して敵を制壓し以て分隊の攻擊を容易ならしめつゝありしが愈々敵に肉薄せんとする頃敵は迫擊砲野砲等の猛烈なる支援射擊下に逆襲し來り我が至近距離に肉薄して手榴彈を熾に亂投し爲めに分隊は一時苦戰に陷つた。然かし氏は素より決死泰然自若終始其の本分たる每發必中の射擊に專念し逐次多數の敵を殪し奮戰大に努めつゝある際無念敵彈命中壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

夫れ忠孝は一道にして良兵と良民とは其の軌を一にす氏の家に在るや至孝鄉にありては良民出でゝ入營するや其の精勤は稀に見る所であつた。而して今次召されて軍に從ふや素より七生報國の覺悟、其の決意、其の忠誠の迸る所難路も飢餓も不眠不休の强行軍も物の數とせず常に進んで至難多端の諸勤務を克服完遂し其の彈雨の下に立つや率先勇敢なる前進となり或は沈着正確なる射擊となり小銃兵たる本分を完うして遺憾なかつた。然るに聖戰の初期此の忠孝兩全の勇士を喪ふ。洵に痛惜の極はみである。然かし士の戰場に臨むや元より生還を期せず氏が肉體は短き現世を終るとも其の赫々たる拔群の武功と忠孝一如良兵良民の示範は軍民の鑑として千載に傳へらるべく不滅の英魂は七生以て皇國を守護すると共に鄉に留まりては一家の守護神ともなり兩親の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　杉井高太郎

馬廠水門附近の血戰に偉功を奏せる名擲彈筒手

氏は岡山縣眞庭郡久世町の人にして父を友太郎母をたつよと云ひ大正二年三月一日に生れ妻シマコとの間に一子勝昌を擧げた。資性温良着實にして責任觀念に富み兩親に仕へて孝行を盡し決死の任務を與へられた當日も寸暇を利用して父母の安否を尋ねて其の健在を祈り吾が身に就いて心配無用と通信して居る。昭和二年三月鄕里の尋常小學校を卒業し引續き同校補習科及青年學校に入り所定の課業を了へ特に青年學校の成績は優良にして表彰狀を附與せられて居る。現役兵として歩兵第十聯隊へ入營し勤務精勵の模範兵であつた。在隊間滿洲事變に出動し各地の警備討伐に從事し功を以て勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。斯くて昭和十年五月善行證書を附與せられ歩兵一等兵を以て歸休除隊となつた。

支那事變勃發するや八月上旬應召赤柴部隊高田中隊に屬し勇躍征途に就いた。北支到着後八月二十日より三日間は楊柳青南方地區の掃蕩に任じ炎熱と泥濘とを克服し勇戰奮鬪附近の支那軍を擊破して治安維持に努め續いて津浦沿線を南下して獨流鎭及七里堡附近に位置し潛入せる敵を驅逐し所屬大隊の補給を安全ならしめた。其の間氏は豪膽熱心克く其の任務を遂行した。

八月二十九日王官屯附近の敵を擊破し同三十一日には雙樓及桃家庄を占領して附近の敵情搜索に任じ九月四日より馬辛庄林庄及馬集の攻擊に加はり五日曲庄、陳庄を攻擊して之を占領し同日午後二時より後屯を攻擊するや氏は銃砲火烈しく身邊に集中すと雖も之を意とせず一進一止敵に近迫し遂に率先敵陣地に突入し午後四時五十分該地を占領した。

九月十日馬廠河水門附近の戰鬪に於て所屬中隊は所屬全兵團中より選ばれて決死隊となり馬廠河の南岸に確實なる渡河掩護陣地を占領すべき事を命ぜられた。嗚呼光榮の重任！　而して死線は目睫の間に横はつて居るのだ。死か生か成功か全滅か全兵團の視目は此の中隊に注がれた。所屬中隊は幾隻かの發動艇に分乘し氏は擲彈筒分隊に屬し午後一時馬廠河の支流を利用し水門に向ひ出發した。馬廠河まで進出するや否や豫ねて豫期せる如く敵の銃砲彈は文字通り雨霰と射注がれた。されど忠勇無双の我が高田中隊は彈雨を冒し午後三時五十分發動艇より勇躍敵岸に上陸した敵の銃砲彈は愈々熾烈を極めたが我が擲彈筒分隊は大に活躍して河岸の敵を擊退し敵の塹壕を利用して態勢を整へた。折柄左正面に蟠居せる敵の掩蓋機關銃が猛烈に活躍するを發見するや直ちに之を射擊し一大爆音と共に之を撲滅した。而して敵兵潰走を認むるや氏は更に良好なる射擊位置を選定する爲め機を失せず少しく躍進したが正面に敵の重火器を發見して直ちに之を射擊し其の第二彈は見事に命中し之を撲滅した。玆に於て所屬小隊の前進を妨害する敵の重火器は完全に撲滅され小隊の攻擊前進は頗る容易となつた。然るに此の敵の迫擊砲彈は突如氏の左前方至近の位置に落下炸裂し其の破片は不幸にして氏の腹部を

貫通し竟に午後五時壯烈なる戰死を遂げた。

噫氏や家庭に在りては一家の柱石として孝養家政を輔け鄕に在りては青年支部長納稅組合長消防組小頭等の要職に就任して熱誠事に當り以て町内の信望を双肩に擔ひ、軍に從ひては忠誠勇武難局に處して從容自若慧眼克く戰機に投合して頑敵を撲滅し以て重要無二の大任遂行の爲め偉大なる貢献を提供した。寔に是れ皇國軍民の龜鑑たるものである。あゝ今や

其の人空しと雖も氏の功績たるや皇軍戰史に輝き其の名は大和櫻と謳はれて千載に芳ばしく其の英靈は永世に生きて尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族の爲め又子孫の爲め常に尊き加護を與へる事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　末盛榮

優秀なる軍犬兵、南苑の激戰に偉功を奏し愛犬と共に殉る（悲痛なる軍犬美談）

氏は岡山縣英田郡粟井村の人にして父を正雄母を玉枝と云ひ大正五年十二月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良誠實にして同情心に富み責任觀念强かつた。又昭和八年三月粟井公民學校を卒業した。公民學校在學間は一日も缺席なく成績亦良好にして校長より賞狀を授けられ又青年團評議員となり熱心同團の爲め盡力し率先垂範青年の本分を盡し團長より表彰された。昭和十年十二月現役志願兵として龍山步兵聯隊へ入營し誠意軍務に精勵し上官戰友の信望を受けて居た。而して翌十一年十月より軍用犬掛として櫻號の飼育を命ぜられた氏は殆んど寢食を忘れて其の飼養訓練に任じ優秀なる成績を擧げた。

支那事變起るや昭和十二年七月南雲部隊本部通信班軍用犬班に屬し勇躍北支戰線へ出征した。斯くて七月二十六日まで唐山附近の警備に就いたが或る夜就寢せる筈の氏の姿が見えないので戰友が探がし求めし處氏は凉しき木蔭に櫻號を寢かし其の傍らに佇みて蚊を追ひやつて居た。戰友は「末盛！　犬も大切だがお前の體はもつと大切だ無理をするな！」と注意すれば氏は「有難う！　併し軍用犬一疋が全軍の危い時を救つて呉れる事もある。俺の體より軍犬の方が大切なんだ」と答へた。あゝ酷熱百數十度の北支の盛夏犬が疲れたと見ては我が水筒の水を頒け與へ食餌も自ら味ひし後ならでは軍犬に與へぬ注意の周到さ犬も溫情に感じて氏の命令には献身的に働いて居た。

七月二十七日團河村附近の戰鬪には所屬部隊の攻擊前進に伴ひ氏も軍犬兵として傳令警戒の諸勤務に服し敗殘兵隨所に出沒する中に優秀なる技能を發揮し所屬部隊の戰鬪に貢献し翌二十八日所屬部隊は南苑總攻擊に參加の爲め午前五時行動を起し午前七時五十分より愈々攻擊を開始した。此の日敵は南苑兵營の圍壁を堅固に死守すると共に密生せる高粱畑を利用して伏兵を配置し所在に狙擊又は奇襲を行つた。所屬諸隊の第一線諸隊は之を擊攘しつゝ追接し何時しか部隊主力との連絡は絶えた。有線電話線は既に使用し盡して傳令に依る連絡も敵の彈雨と高粱に妨げられて思ふに委せず進まんか嵐の如き敵の猛火は暫しも歇まずして徒らに損害を增す許り應戰せんか前進せる友軍に大なる危害を與ふるの處がある。部隊長の苦慮や蓋し察するに餘りある次第であつた。部隊長は終に軍用犬を使用するに決し岩倉曹長に兵一軍用犬二を附し第一線に向ひ出發させ本部位置には氏を留め置いた。氏は櫻號とブラック號の二頭を曹長に隨行させるに方り軍犬に向ひ「愈々お前達のお役に立つ時が來たぞ、日頃の訓練を忘れず確つかりやつて呉れ、俺は此處で待つて居るからな」と云ひ聞かせると意味がわかつてか二頭は耳を立て賢こそうに氏を見上げた「よしわかつたら行つて來い、前へ！」と令すれば曹長の後を追ひ仲よく駈け出した。軍犬が出てから四十分五十分と經過したがまだ歸らぬ。曹長はまだ連絡が取れんのかな

と部隊長は悲痛の聲を放つ。氏は一心に二頭の無事を祈念して待ち焦つて來た。一時間經過！「部隊長殿！　軍犬がかへつて來ました」と報告し「ようし來い〻〻」と氏は手を擧げると二頭は喜び勇んで疾風の如く駈け來たり氏の體に激しく飛びつくのだつた。「御苦勞！　よくやつてくれたなア、俺は隨分心配したぜ、お前達の手柄は俺の手柄だ」と頭を撫で信書を外づして部隊長へ提出した。信書を閲讀せる部隊長は末盛！　もう一度軍犬を出してくれ本隊は敵の右翼に移動する事になつた。同時に第一線部隊は敵の後にまわり敵の兵營への退路を遮斷させねばならぬ其の命令を持たしてやるのだ一刻を爭ふ急用だぞ」と命ずれば氏は其の命令を櫻號の首輪に確かと結びつけ「櫻！　今度はお前ひとりで行くんだから氣をつけろよ擊たれそうになつたら體をかくすのだぞ、彈丸の音がしたら凹地に飛び込めよい〻か、わかつたかと頭を撫でれば櫻號は切耳を立て〻鼻をピクつかせると「前へ！」と令した。軍犬はサツと身を躍らせ第一線目がけて高粱の彼方に消え去つた。それより約三十分間敵は友軍の動きを悟つてか死物狂ひの猛射、死傷者は頻出する。末盛！　軍犬はまだかと再び部隊長の悲痛の聲、ハイまだ歸りませんと氏は齒を喰ひしばつた。其の途端五百米前方に棒の如く櫻號が體を伸ばして疾走して來る。お〻來たゝゝ！　と氏は目も放さず見えかくれる彼れの姿を見守つた。櫻號の前後には今しも敵の彈雨が射注かれて居る。あつ櫻！　危い！　氣をつけろ、四百米三百米もう大丈夫！　急ぐな！　百米！「よーし來いゝゝ」と片手を擧げた。櫻號は嬉しそうに矢の如く駈け來る早や五十米途端に凹地に飛込んだがハタと打倒れた。「あつ櫻どうした」と氏は立上つた。傍らなる山口軍曹は末盛危い！　と注意した。氏は狂氣の如く櫻！　俺は此處に居るぞ早く來い！主人の聲に勵まされた櫻は左後足を引摺つたが歩けそうもない。櫻やられたか、よし待てと櫻號を目がけて飛び出したが二三十米を前進して氏も亦打倒れた。櫻號は辛うじて主人の所に近づいたが氏は頭を上げず聲もなく滴る血汐で周圍の草を染めて居た。彼れは悲しそうに氏の周圍を三度びめぐりて鳴きつゞけた。山口軍曹が氏を介抱に來るを認めて安心したか一聲叫ぶ共の瞬間櫻號はまたも敵彈に胸を打貫かれて斃れた。末盛！　傷は淺い！　確かりせ！　お前が死んで軍犬をどうすると聲を絞れば氏は軍曹殿櫻の通信を！　と叫んだ。軍曹は「わかつた櫻は首尾克く任務を果たして此處に寢て居るぞ」と氏を肩にかけ歩み出した。氏は櫻號の死に氣がつかず軍曹の背に「よーし來い櫻」と呼び續けた。軍曹は共の聲に胸を打たれて泣き崩れ地に伏して仕舞つた。氏は咽喉部の盲貫銃創であつたが部隊長は衛生隊をして櫻號の屍を懇ろに葬らせ又氏の手を握りしめ聲を絞つて感謝し天津病院へ送つたが七月二十九日午前一時竟に尊き人柱となつた。

あゝ氏の軍犬に對する熱誠溫情たるや到底尋常人の及ばざる所而して責任觀念の旺盛なる眼中敵彈なく況んや苦熱も勞苦も物の數ではなかつた。果然南苑の激戰に際會するや共の愛犬と共に優秀なる技能を發揚し以て部隊戰勝に重大なる素因を與ふるに至つた。今や共の人愛犬と共に空しと雖も共の赫々たる功績は天晴れ皇軍戰史に輝き共の芳名は戰場の美談として百世に謳はれ共の不滅の英靈や護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　石田信太郎

水路輸送中敵襲を受け孤軍奮闘職に殉す

氏は靜岡縣磐田郡袖浦村の人にして父を字平母をよねと稱し明治四十年十二月五日に生れ妻あきとの間に長女八千代次女わさ子の愛子がある。大正九年三月鄕里の小學校高等科一年を修了したが在學間常に學業成績優等にして優等賞及び證狀を授與されて居る。資性溫厚にして熱心事に忠實にして鄕黨の敬愛を受け模範青年團員として二ヶ年間支部長に推擧さ

れ或は本團實業部長として盡瘁し團長より感謝狀を贈られ又消防手としても勤續功勞章や表彰狀を受け又氏は未だ軍隊教育を受けざる特務兵なるに拘はらず在鄉軍人分會員として熱心克く勤め爲に昭和十二年一月には模範會員として豐橋支部長より表彰狀を授與せられた。

支那事變勃發するや昭和十二年十月召集に應じ三島野戰重砲兵聯隊に入隊し間もなく伴野部隊に屬せしめられ勇躍征途に就き某地碇泊場司令部に配屬を命ぜられた。而して十二月九日軍需品輸送の任務を帶び第二分隊長小池伍長の指揮に屬し第四班第四舟の舟長兼舵手として舟艇に分乘し水路長興に向ひ前進中午前十時二十分頃西塘橋附近に到るや俄然優勢なる陸上の敵と遭遇し兩岸より猛射を受け玆に不利なる戰鬪を展開するに至つたが全員獅子奮迅の勢を以て孤軍奮鬪し午後零時三十分寡兵克く衆敵を擊退した。本戰鬪に於て氏は任務の重要なるを感じ努めて舟を安全地帶に廻航せんとしたが其の際不幸にして敵彈を受けて斃れ　陛下の萬歲を唱へつゝ竟に聖戰の尊き犧牲となつたのである。

顧みれば氏は平素忠實に生業を勵みて家を治め傍ら公事に奔走して終始一貫熱心誠實に努力してゐたので數々の善行と共に模範青年として尊敬と信望とを繫ぎ幾多の感謝や表彰狀等を受け眞に忠良なる臣民の儀表であつた。而して一度應召して軍に從ふや靈忠報國の至誠自づから躍動し獻身的に自己の使命に努力中であつたが初陣とも云ふべき第一回の重要任務に斃れたことは惜しみても尙餘りありと謂ふべきである。しかし本來の任務は華々しき第一線の活躍にあらずして地味なる後方勤務であつたが作戰地域の急速なる擴大は常に後方連絡線に不眠不休最大の努力を要求し加ふるに危險の度は愈々增大を覺悟せねばならぬ情況下に一意任務の遂行に邁進する輜重特務兵の勞苦は想像以上にして其の功績は敢て第一線に讓らざる輝かしくも尊きものが多いのである。氏の最後亦聖戰々勝の尊き礎石として皇軍戰史に牢記せらるべく其英靈は永世に生き尙も皇國並に一家の守護神として其前途に加護を垂れ就中二愛兒の將來に對しては限りなき佑助を添へるであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　濱田吉雄

小行李監視中敵の夜襲を受け之を擊退して斃る

氏は茨城縣眞壁郡太田村の人にして父を保次郎母をみの養母はしいと云ひ大正二年九月五日生で未だ獨身であつた。資性溫厚幼にして養父を失ひ養母に育てられ克く孝養を盡した又職務に精勵責任觀念强く如何に困難の日も工場に通勤し一日たりとも缺勤せしことなく模範工であつた。昭和三年三月日立町尋常高等小學校を卒業引續き甲種夜學校に入校同六年三月同校を卒業し直に本山採鑛に就職した。昭和九年五月輜重兵特務兵として宇都宮輜重兵大隊に入營し三ケ月間在營の後除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月十七日應召石黑部隊本部に編入せられ勇躍征途に就いた。氏は應召以來熱心精勵不眠不休輕馱馬の愛護積載物件の整備等率先勞務に服し鋭意其本分に邁進した。北支戰線到着後九月廿一日より二十三日に亘る大

冊河々畔石頭村附近の戰鬪に際しては聯隊本部小行李附として本戰鬪に參加した。聯隊は大冊河左岸陣地を夜襲したる後保定西南方地區に向ひ追擊し各大隊は退却中の敵及敗殘兵と交戰しつゝ保定西南方三里の豐台及菅莊附近に前進し當夜聯隊本部は豐台に停止して宿營した。聯隊小行李は豪雨後道路極度に泥濘車輪を沒し或は車輛顚覆し或は輓馬斃るゝ等非常なる難行軍を續け漸く午後十時十分聯隊本部に追及することが出來た。それより開進を終り警戒兵を配置し主力は支那民家に入りて漸く休宿に就いた。氏は警戒兵として馬繫場及車廠の警戒勤務を命ぜらるゝや終日の難行軍に綿の如く疲勞困憊せる身をも厭はず欣然任に就き休宿せる主力の安危を一身に擔ひて其の重大任務に緊張服務しつゝあつた。時しも午前二時突如として敵兵二十五六名馬繫場附近に現はれ手榴彈二發を投擲しつゝ急襲して來た。敵は從來輜重と見れば襲擊し來る事を知つて居た氏はかゝる事あるを豫期せるものゝ如く機を失せず銃を執り急射擊を爲して主力に急報すると同報に其沈着正確なる射擊に依り敵を斃しつゝ防戰大に努め馬繫場を死守した。此銃聲を聞き間もなく機關銃中隊の下士哨は側面より援護射擊を開始せるを以て氏は此機逸すべからずと爲し敢然勇躍敵中に突入せんとするや無念其の刹那敵の一彈頭部に命中し竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。此敵襲に依り馬匹數頭及警戒兵三名戰死するに至りたるも氏の發射したる銃聲に小行李主力及機關銃中隊の警戒兵等駈け付け遂に敵を擊退するに至つた。

氏の鄕に在るや責任觀念旺盛模範工であつた。此性格は戰場に臨むも終始一貫率先あらゆる困難を克服し其本分を完うした。偶々敵の急襲を受くるや責任觀念の迸る所將た又軍隊教育日淺かりしも素より水戸健兒父祖傳承の日本精神の湧出ずる所一身を君國に捧げ十倍の敵を支へて馬匹車輛を死守し最善を盡し悅んで其任に斃る。是れ忠誠の顯現にして四邊血に染むるも積載物件に一指だも觸れしめざりしは皇軍輜重の誇と謂ふべきであらう。征途に上りて以來僅かに三旬而かも氏の樹てたる隱れたる努力と赫々の武勳とは責任觀念の示範と共に千載に輝き東亞建設の礎石となりたる氏の芳名は萬古に流れて盡きぬであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　西岡瀧夫

大敵の奇襲を受け勇戰奮鬪の後七亘村の華と散る

氏は三重縣志摩郡波切町の人にして父を近藏母をとくと云ひ明治四十一年十二月二日に生れ妻ミサヲとの間に啓、日出子、美代子の一男二女を擧げた。責性溫順にして責任觀念に富み又不屈不撓の氣慨を有し事に臨みては剛毅果斷の人で平素人に交りては誠實を旨とし級友は勿論一般鄕人の信望を受けて居た。大正十二年三月波切小學校高等科を卒業し在學間の成績は常に優良であつた。昭和五年四月現役兵として京都輜重兵大隊へ入營し翌五月下旬歸休除隊となり其後は一家の中堅となり家業に精勵して居た。

支那事變起るや昭和十二年七月下旬應召加藤部隊藤本中隊の馭兵として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着以來京漢線に沿ひ行動し九月中旬より下旬にかけての涿州保定の會戰に於ては所屬中隊長の指揮下に泥濘汎濫地帶に名狀すべからざ

る勞苦を嘗めつゝも不眠不休の難行軍を續け以て第一線部隊に彈藥補給の重任を完うし續いて十月中旬に亘り石家莊滏陽河附近の掃蕩戰にも異常の努力を以て第一線部隊への彈藥補給に任じ以て皇軍の神速なる作戰に貢獻せる所大であつた。

十月二十六日山西省方面に作戰する兵團の左縱隊に配屬せられたる氏の所屬中隊は中隊長藤本中尉の指揮を以て左縱隊に追隨し南障城に於て糧秣を交付し之が補充の爲氏の所屬小隊は中隊主力に別れ小隊長土肥少尉の指揮を以て微水鎭に至り更に糧秣を滿載し再び第一線に向ひ急行軍を行ひ同日正午頃七亘村に達し晝食の爲小休止を行つた。連日の活動に既に人馬は疲勞甚しと雖も小隊任務の重きと第一線の現狀況とは大休止を與ふる暇さへなかつたのである。午後零時三十分には早や小隊は七亘村西方の急坂路を攀登して居た。突如先頭を行進中なりし自衛隊は前方に當り二三の敵影を認めたかと思ふ間もなく急射擊を受けた。更に敵情を視察するに豈圖らんや約一ヶ大隊の敵兵が待伏せをして居つた。

間もなく右側方に約一大隊左後方に約二三中隊の敗殘部隊現はれ相次いで我が小隊に對し小銃機關銃及迫擊砲の猛射を浴びせかけた。あゝ左側は數十丈の斷崖溪流に屹立し右側は千尋の谷路側に迫り稜線上の坂路は岩盤にて銃砲彈の著發炸裂の光景物凄く小隊は眞に進退是れ谷まつた。軍馬は敵彈に狂奔して坂を攀登せんとするもの斷崖より轉落して即死するもの等悲慘とも凄愴とも名狀すべからざるものがあつた。氏は極力狂奔馬の集結に努め又驚れし馬の荷を集積したる後馭兵を以て編成せる拔劍隊の一員に加はり肉薄し來る敵に立ち向つた。此時我が約二十名の自衛隊は彼方の岩上此方の谷間に擊つ刺す斬るの激戰中であつた。此時左方の斷崖を攀ぢ上り岩蔭に身を潛め銃口をさし向けありし一敵を目敏くも發見せる氏は飛鳥の如く飛び込んで一擊の下に刺し殺し勇躍更に他の敵に向はんとする一刹那一彈飛來胸部に貫通銃創を受け打ち倒れ萬歲を叫ぶも口の中午後一時五十分壯烈なる戰死を遂げた。所屬部隊は逐次に尊き犧牲を出し乍らも最後の一員となる迄戰ひぬかんと前後約五時間に亘り死鬪を續け同日午後五時三十分遂に惡むべき敵部隊を擊退するを得た。

氏や家庭に在りては一家の中堅として兩親に孝養を盡し妻子を薫陶して堅實なる家風を作り又鄕人に接するや溫容誠實洵に模範青年として敬愛せられ軍に從ふや克く上官の敎訓を迎へ同僚に厚く馬匹を愛する事我が子の如く一般兵員の模範として賞讃を受けて居た。一度び聖戰に參加するや唯々君國の爲に默々として幾多の辛酸に堪へ忍び天晴れ皇軍輜重の本領を發揮した蓋し偉大の功績を樹てたりとて氏の所屬隊が時の軍司令官より感狀を附與せられしも決して偶然ではないのである。七亘村附近に於ける大敵の奇襲に際し沈着剛膽自己の本務を全うし更に敢然身を挺して頑敵を擊攘せんとせしも衆寡の懸隔甚しく有爲の氏竟に不幸兇彈に玉碎し雄魂呼べども歸らず眞に悲痛の極である。然れども氏の功績たるや皇軍戰史に異彩を放ち其芳名は大和櫻と其華を競ひて千載に芳ばしく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家殊に愛子等の前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　越智政雄

寡兵奮鬪大敵を擊退して江南の華と散る

氏は愛媛縣周桑郡壬生川町の人にして亡父を駒吉母をタケヨと云ひ大正三年十二月十五日に生れ未だ獨身であつた。性豪放闊達にして明朗友情に厚く又責任觀念に富み武道を好み劍道は二段に達して居た。昭和四年三月壬生川小學校高等科を卒業し爾後家庭に在りて家業を手傳ひ昭和十二年八月愛媛縣新居濱市住友機械製作所へ入所し誠意勤務に精勵して居た。

支那事變起るや第一補充兵輜重兵特務兵として昭和十二年十月應召常岡部隊に屬し內輪通信小隊の電話手並に配達手の職務を命課せられ勇躍中支方面への征途に就いた。出征に方り友人に對し「オイ俺のからだを見るなら今の中によく見て置いてくれ」と云ふ故友人はなぜかと尋ねし處氏は「萬一生きて當り前に歸へる時には俺の胸には勳章一パイで輝き眩ゆくて見上ぐる事が出來まいよ」と元氣一パイで語つたと云ふ事である。

斯くて中支江蘇省に到着し十一月十五日亭林鎭に第三通信所を開設せらるゝや氏は終始熱心に電話通信に精勵する外敗殘兵所在に出沒する危險地域に補線勤務に從事したが平素武道によりて鍛へ上げたる膽力を以て豪膽不敵の行動を爲し戰友を驚かし又其の志氣を鼓舞し能く任務を全うした。

十一月十六日より金山に通信所を移轉するや氏は所長の命を受け電話手及び配達手として極はめて頻繁なる通信勤務に服し不眠不休の努力を以て敏活正確に業務を處理し以て軍の通信連絡に寄與する所頗る多かつた。

所屬第三通信所は十二月九日より安徽省十字舖に移轉した。此所は西は寧國、蕪湖方面へ北は南京へ南は廣德を經て杭

州方面に對する通信網の一樞軸をなせる重要通信所であつた。氏は前任務同業繁激なる通信所勤務に堪へて倦む事を知らず殊に此附近は山岳丘阜綿亘して補線作業も容易ではなかつたが氏は奮勵努力よく通信連絡を確保して所長を輔佐した。

十二月二十一日所屬中隊は主力を擧げて杭州攻擊に參加し獨り此十字舖通信所のみが最後迄重要通信の爲殘置されて居た。此日多數の重輕機關銃を有する敵兵約五百名は突如氏等の通信所に來襲した。味方は三十九名の警備隊と十四名の通信所々員のみで眞に累卵の危機に直面した所長は廣德駐屯の部隊に增援を請求すると共に一名の通信手をして電話機を死守せしめ通信所々員をも警備隊に增加して防戰するに決した。氏は電信兵の銃を執つて第一線に飛出したが文字通りの彈丸雨飛狀態であつた。併し豪膽なる氏は少しも驚かず適切有效なる射擊に依り敵に多大なる損害を與へたる後增援隊と共に竟に壯烈なる突擊を敢行して敵を潰亂敗走せしめた。本戰鬪は前後六時間に亘る激戰にて夜に入つたが戰鬪終了後兵力集結點呼の際氏の行衛不明を知り翌朝搜索の結果氏は敵彈の爲頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げありしを發見した。併し氏の用ゐたる軍刀の血糊は氏が縱橫無盡の勇戰を物語るものにして將兵一同は涙と共に尊き犧牲に肅然として默禱を捧げた。

氏や志操堅確而して武道に依り鍛練せる體力氣力は正に群を拔き報國の丹心鐵よりも堅かつた。果然聖戰に參加するや職責の命ずる所寢食を忘れ不眠不休の努力を以て軍の重要通信連絡を敏活ならしめ又山間僻地に敗殘兵の出沒する不安の

情況下に宛も無人の境を往くが如く補線を確實ならしめた。而かも不測の敵襲を受くるや必勝の信念を以て勇戰奮鬪し遂に大敵を擊退した。寔に是れ得難き勇士にして軍人の龜鑑であつた。あゝ斯かる前途有爲の士を喪へるは洵に痛惜禁ずる能はざる所である。然かし氏の功績たるや皇軍戰史に牢記せられて其の芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　渡邊鈴市

泥濘彈雨を冒して糧秣輸送の重任を全うし大場鎭郊外に散華す

氏は岐阜縣加茂郡古井村の人にして父を末五郎母をじようと云ひ明治四十四年三月二十三日に生れ未だ獨身であつた。性溫良にして氣慨に富み義務心厚く諸人の愛敬を受けて居た。大正十一年三月古井尋常小學校を卒業し其後は家庭に在りて父母を扶けて家業に勵み徵兵檢査終了後は水力電氣會社の工夫として九州及北陸道方面に轉勤し誠實業に服し同僚間の信用も厚かつた。

支那事變起るや輜重兵特務兵として昭和十二年八月應召高橋部隊に屬し岡本中隊の要員として勇躍中支方面への征途に就いた。上海戰場に到着後は九月中旬朱家宅附近に於て飛行場開設の爲作業隊員に加はり降雨泥濘を意とせず全員泥人形となりて獻身的に作業に從事し又劉家行及び顧家宅附近に近く敵と相對峙する第一線部隊の爲絶え間なく飛來する敵の彈雨を冒して吳淞日華紡績會社―揚行鎭間を往復して糧秣輸送に從事し九月二十三、二十四日の兩日は分隊長遠藤伍長の指揮下に寺前村附近の道路補修作業を完成し更に同月二十七日には揚家宅附近の支那住民を寶山城に護送する等連日の疲勞を意とせず率先奮勵以て所屬隊の任務達成に寄與する所頗る多かつた。

十月三日より十五日にかけての蘊藻濱クリーク附近の戰鬪に於ては依然吳淞日華紡績揚行鎭間を往復して糧秣輸送に從事し更に揚行鎭―無線電信臺間の糧秣輸送を命ぜられた。時恰も六日より降り出したる江南特有の雨は五日間も降り續き殊に十日は朝來暴風さへ加はつて上海戰場はどこも彼處も水と泥の巷と化した。クリークの水は溢れ壕壕の泥水は胸に浸り後方を往來する人馬は膝を沒するぬかるみに惱み而かも隻影だも敵眼に觸れんか忽ち雨飛沫の中に敵のトーチカが火を吐いて猛射を浴びせかけ又少時間を間しては巨大なる砲彈が空氣を切つて飛來する狀況で此間に於ける糧秣輸送隊の行動たるや是れ亦決死的のものであつた。併し第一線諸部隊の戰力維持の爲貴重なる重任を自覺せる氏は一切の勞苦一切の危險も眼中に無く連日連夜默々として任務に邁進した。

十月半ば頃より我が軍は上海全陣地の死命を制すべき大場鎭附近の堅壘を攻略する爲攻擊準備に取りかゝつた。氏の所屬部隊は復も其第一線部隊の爲糧秣補給の重任を課せられた。敵は到る處縱橫にクリークを張りまわし散兵壕を十重二十重に構築しあらゆる精銳の銃砲火器を配置し一木一草の動きも見逃さじと監視の目を光らせて居た。されば前にも增して銃砲彈の飛來甚だしく又行動を著しく制肘された。併し氏は既に生死を超越して一意任務の遂行に努力した。斯くて十月二十日中隊は王宅に宿營し氏は其警戒動務に就いたが其夜吳淞クリ

ーク右岸の敵陣地より敵彈頻りに飛來し極めて危險下に曝されたが氏は毅然として宿營地周圍を警戒中偶々一彈飛來無念にも左腋下に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏は應召時既に堅く一死報國を家人に誓ひ細々に後事に關する遺言をなし元氣一パイで出征の途に就いた。果然出征以來常に志氣旺盛にして廣汎なる諸任務を遂行し又難局に直面して愈々豪膽不敵眞に一死報國の實を擧げ將兵一同に深き感激を與へて居た。未だ軍隊教育をも受けあらざりし氏が平素の修養と聖戰の目的とに鑑み斯くも見事に重任を遂行し得たるは獨り皇軍輜重の誇たるのみならず我が國民の誇と謂はねばならぬ。然るに斯かる勇士を喪へるは轉た哀悼に堪へざるも氏や良民良兵の鑑、而して其の隱れたる大いなる功績は天晴れ皇軍戰史に牢記せらるべく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇國を護り又氏が出征時に遺族に對して述べたる至情はやがて一家の守護神ともなり限りなき佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　中安一四

勇敢なる小行李班員、危機に彈藥補給を完うして玉碎す

氏は兵庫縣加西郡賀茂村東劍坂の人にして父を安治母をゆうと云ひ大正四年十二月四日に生れ未だ獨身であつた。昭和五年三月賀茂小學校高等科を卒業し爾後家庭に在りて父母を助け農業に從事して居つた。資性快活にして明朗且つ孝心深く友情濃かに殊に又懶惰を惡み精勵倦まず應召の際の如きも平然として出發當日まで家業に從事し諸事間然する所なく整理を了へて家人に別れを告げたとのことである。昭和十一年十二月輜重兵特務兵として姫路輜重兵大隊に入營し同十二年一月滿期除隊となつた。斯くて後半歲日支事變の勃發するや八月上旬應召沼田部隊に屬し勇躍北支方面への征途に就いた。

北支に上陸後所屬大隊は九月初旬津浦沿線の戰鬪並に同月中旬にかけての馬廠附近の戰鬪に參加したが氏は小行李馭兵として萬難を排し忠實其任務を果たし次で九月十三日よりの滄州附近に於ける戰鬪に當り所屬大隊は聯隊の第一線部隊として二十一日午後九時行動を開始し同十一時より馬落坡の敵主陣地に對し夜襲を決行した。當時聯隊本部と大隊本部間の連絡杜絶し頗る苦戰に陷り敵前三百米の地點に於て敵火餘りにも猛烈にして一歩の前進をも許さず二十二日午後三時頃に於ては此儘の態勢にて彼我互に銃砲火戰の絶頂となり大隊長自ら銃を執つて射擊せざるべからざる狀況に陷り一進一止徐々に攻め寄せはしたが竟に第一線の各中隊は前日來の激戰により彈藥の三分の二迄使用し局部的には殆んど射耗し盡せる部隊もあつた。氏は小行李班員であつたが此時北浦小行李長が第一線彈藥交付隊を編成するや氏は率先して之に加入し小銃彈七百二十發を携行豆店部落より泥濘地區を突破し大隊第一線に向ひ勇進し第一線の後方約二百米に達せし頃は敵火愈々猛烈を極はめ前進頗る困難になつた。氏は此時戰友を勵ましつゝ最先頭に立ち一進一止重き彈藥を搬送しつつ躍進を續け遂に第一線に到着し氏は直ちに第二中隊左第一線小隊に交付すべき命令を受け勇敢にも猛火を冒して敵前を横行し該小

隊の位置に至り彈藥を交付せし所共の交付終らんとする瞬間惜しくも敵彈頭部を貫通し敵前約八十米突の地點に於て壯烈なる戰死を遂げた。時に午後三時であつた。

當時氏が彈藥を交付せし第二中隊方面は彈藥既に缺乏し此の際に於ける補給は危機に際し百万の援軍來着したりしにも等しきもので玆に同隊は生氣を恢復し勇躍奮戰益々敵を此方面に牽制し以て聯隊爾後の攻擊を容易ならしめた。洵に此の際に於ける氏の功績は拔群であり共勇敢にして不屈不撓の行動は輜重特務兵の範とすべきものである。氏が鄉里の菩提寺大島住職氏の葬儀に際し引導詞を選して曰はく

報國丹心已壓天　忠肝徹處自通禪
滄州城外飜身去　赫々功勳滿大千

と。

氏や參戰の日淺かりしも共武勳と勇名は誠に赫々として千載靑史に輝き共英靈は皇國並に一家の守護神として佑を將來に垂るゝであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　村永利正

敵彈下に架橋材料運搬の任務を果たし職に殉す

氏は石川縣能美郡板津村の人にして亡父を內右衞門母をみつと云ひ大正三年十二月二十一日に生れ未だ獨身であつた。

資性溫厚着實にして義務心厚く業務に忠實なることは昭和七年より大阪市幾島商店に勤め滿五年の後一般從業員の模範なりとして大阪菓子同業組合長より表彰を受けた程であつた。鄉里の高等小學校卒業後は暫く家業を手傳つて居たが昭和七年以來前記の職業に從事し昭和十一年四月特務兵として金澤輜重兵聯隊に入營約二ヶ月の軍隊敎育を受け歸休除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月二十日井口工兵部隊に應召し同月二十九日勇躍征途に就いた。中支に上陸するや天谷支隊に配屬せられ吳淞埠頭に露營し機の到るを待ちしが九月下旬所屬支隊が羅店鎭附近の敵陣地を攻擊するに及び敵前架橋の爲器材運搬に從事するや氏は率先猛火を冒し果敢なる行動に依り所命の任務を果した。所屬小隊の此勇敢なる行動は全軍の龜鑑として時の軍司令官より名譽の感狀を附與せられた。次いで十月九日氏の所屬中隊は輜重隊長の指揮に屬し劉家行附近の戰鬪に際し該地後方千米の張宅に露營し彈藥糧秣の交付に從事し或は馱馬に依る陸路輸送に或は携行鐵舟を以て の水路輸送に十月二十八日に至るまで連日連夜不眠不休の活動を續けた。此間氏は常に率先彈雨を冒し辛酸を克服し萬難を排して補給の任を完うし第一線の戰鬪に支障なからしめた。

十月二十九日所屬中隊は再び工兵中隊の指揮に屬し陳家灣に露營し工兵隊右渡河作業隊に囑し郁家宅西南三百米の蘇州河架橋地點に器材を運搬交付すること數回此間暗夜惡路と闘ひ人知れぬ辛苦を重ねつゝ而かも勇敢に行動し每回適時搬送

交付を完うし工兵隊の作業に些の澁滯をも生ぜしめなかつた。當時蘇州河の軍橋は連日に亘り敵彈の爲破壞せられ其都度多數の補修材料を要する狀態であつた。十一月六日も亦補修材料を運搬するに方り氏は西村伍長の指揮する混成分隊の一員として之が運搬を命ぜらるゝや惡天候の爲破損甚しき道路上を七時間餘に亘り奮鬪努力以て陳家灣に殘置しある器材を馬家宅東北方一粁の地點に運搬し完全に其の集積整理を終り午後四時五十分頃宿營地たる揚宅東北端に至りし時不幸敵砲彈落下炸裂し其破片を蒙り壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の鄕に在るや既に模範青年として定評あり出でゝ戰線に立つや前線と同樣敵の彈雨に曝されつゝ唯々後方勤務の重大なるを自覺しつゝ或は熾烈なる銃砲彈雨を冒し或は堅忍惡路を意とせずあらゆる辛酸と危險の下常に隊員に率先精勵して此至難なる任務を完うし以て第一線戰捷の獲得に牢固たる礎石となつた。其隱れたる功績は正に皇軍戰史に牢記せらるべきものであつた。氏や軍隊に於て受けたる敎育日數は短かゝりしと雖も其忠君愛國の至誠の迸る所直に軍人精神の精華となつて職責の存する所剛勇機敏克く皇軍輜重の本領を遺憾なく發揚するを得た。斯かる忠勇義烈の士を喪ひたるは眞に痛惜禁ずる能はずと雖も其名は永世に語り傳へて芳ばしく其英靈亦不滅に生きて護國の神と仰がれ尙も皇國の前途に又一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　黑川克己

重圍の中に死鬪數時間遂に敵を擊退し靈邱郊外の華と散る

氏は東京市四谷區東信濃町の人にして亡父を半助亡母をスヱと云ひ明治三十五年十月十六日に生れ妻だいとの間に義巳惠美子、慶子の三愛子を擧げた。性溫厚篤實にして孝心深く又義理人情に厚くして妻子に對する溫情は勿論他人に對する同情世話も極はめて麗はしく近隣知己の信望自づから一身に蒐まつて居た。大正四年三月東京市靑山尋常小學校を卒業後三田英語學校を經て早稻田工手學校豫科へ入學し大正十三年一月同科第二期の課程を修了したる後同年八月より芝浦マツダ自動車商會へ入社し更に昭和五年三月自動車運轉手の免許證を受け同年五月より倉田自動車工業株式會社へ入社し引續き勤務して居た。氏の業務に服するや熱誠忠實忽ち雇主の信賴を受け入社後幾年も經ずして下級店員の監督を命ぜられし程にて店員一同よりも心よりの敬愛を受けて居た。大正十一年十二月特務兵として近衞輜重兵大隊へ入營し鍛工術を修得し能く其の優秀なる技能を發揮し翌十二年一月滿期除隊となつた。

支那事變起るや間もなく應召大畠部隊に屬し矢島中隊第一小隊第一分隊要員として勇躍征途に就いた。斯くて所屬中隊は八月中旬北支豐台に到着し爾後北平南口北柳樹林附近にかけ殆んど晝夜兼行殘敵蠢動の中降雨泥濘の惡路を征服しつゝ東奔西走補給業務の重任を果たし以て自動車輜重の本領を發揮した。其の間氏は不屈不撓の精神と卓越せる修理技術と運轉技能とを發揚し克く分隊の中堅となり分隊長を輔佐し部隊行動に貢獻する所頗る大であつた。

九月二十四日所屬中隊は長城線奪取の準備中なりし兵團へ彈藥糧食補給の命を受け其の重任を完うしたが當時第一線の

戰況は頗る急迫を告げ同夜中隊は至急後方へ歸還し新鋭の歩兵部隊を輸送すべき新任務を受領した。明くれば二十五日夜來の豪雨全く晴れ渡り朝陽大行山嶺に照り映へて一入身に泌む寒冷を覺へた。將兵一同緊張裡に午前九時靈邱に向ひ前進したが午前九時十五分小寨子の西方隘路口にさしかゝるや突如進路の前方に當り數十名の敵兵現はれ急射擊を浴びせて來た。氏は先頭自衛隊員として中隊の先頭を走行中であつたが號令一下自動車より飛び降りて直ちに應戰した。間もなく百數十名の敵兵側面に現はれ機關銃及迫擊砲を以て猛射を浴びせて來た。見る見る間に無數の敵部隊は全く所屬中隊を包圍して仕舞つた。是れ敵の正規兵約一箇旅が我が兵團の背後を脅威せんが爲め夜來の雨を衝いて迂回して來たのであつた。衆を恃める敵軍は我が中隊の防禦力を寡弱と見て猪突猛進間近く襲ひかゝつて來た。氏は彈雨の中に神速機敏に自動車の事故車輛の修理を完了し更に銃を取り午前十時頃佐藤上等兵と共に肉薄し來れる敵部隊に突入して之を潰走せしめた。此の際氏は左脚に貫通銃創を受けたが之に屈せず連續急射擊を以て敵に多大の損害を與へた。敵は新手を加へつゝ崩雪れ込むを豪膽沈勇の氏は毫も怯まず勇戰奮鬪中無念胸部に貫通銃創を受け玆に壯烈なる戰死を遂げた。然かし所屬中隊は氏等の尊き犧牲に依り後續車輛の集結を終り直ちに戰鬪に加入し激戰實に四時間に亘り幸にも友軍中西部隊及歩兵部隊の來援を得て遂に十數倍の敵を擊破し之を潰亂敗走せしむるに至つた。

氏や誠實溫良克く一家を治め以て克く親先祖の負託に應へ出でゝ軍務に服するや忠實熱誠克く俊秀の技術を發揮し上下の信賴特に厚かつた。而して今次聖戰に臨むや數十年來北支に稀なる降雨泥濘の中に克く自動車輜重の本能を發揮せしめ又不測の大敵に包圍せらるゝも沈勇機敏自己の職分を完うし竟に清く君國の爲め一命を捧げ靈邱郊外一朝の嵐に散つた。あゝ何たる輝かしき生涯なりしぞや寔に是れ皇軍輜重の華であり又一般軍民の鑑と謂ふべきである。斯かる有爲忠誠の士を喪へるは眞に痛惜限りなしと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて芳名を後世に謳はれ不滅の雄魂は護國の神と仰がれて神靈尙も皇國並に一家殊に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵一等兵勳八等功七級　山本清

雨下する敵彈下に彈藥補充に任じ大場鎭郊外に散華す

氏は愛知縣幡豆郡福地村の人にして亡父を清次郎母をしやうと云ひ大正四年十二月二十二日に生れ未だ獨身であつた。性溫良にして責任觀念に富み不屈不撓の氣慨を有し又母に事へて克く孝養を盡し世人の愛敬を受けて居た。昭和二年三月鄕里の尋常小學校を卒業し其の後は家庭に在りて母を扶け一意專心農業に精勵して居た。昭和十二年五月補充兵敎育召集として三島野戰重砲兵聯隊へ入隊し熱心勉勵身心を鍛錬し克く砲手としての技能を修得し同年七月召集解除となつた。歸鄕後は軍隊敎育の成果と相俟ち益々質實剛健に奮鬪努力の精神旺溢し家業に精勵以て家運の隆昌を圖り克く良兵良民の實を擧げて居た。

支那事變起るや同年九月應召淺田部隊に屬し中隊段列要員として勇躍中支方面への征途に就いた。中支到着後所屬部隊は軍直轄砲兵として十月三日より秋山部隊の戰鬪に協力し劉家行より順悟揚亭宅附近に至る陣地奪取に參加した。此の方面は上海戰線の中央正面にして十月三日に於ける當面の我が軍は劉家行北沙宅顧家宅の線より攻擊を起し同日夕刻には概ね上海街道を越え翌四日は一部を以て瀏藻濱クリーク方面に主力を以て顧家宅西方地區に向ひ戰果を擴張し中央正面の攻擊は多大なる成果を收めたのであるが所屬部隊は三日より八日に亘り頻繁なる砲擊を實施し之れが彈藥整備は晝夜兼行多

大なる勞力を要した。氏は其の間絶え間なき敵の彈雨を冒して彈藥の整備砲側への補充に献身的の努力をなし以て所屬中隊の戰鬪に支障なからしめた。

所屬部隊は十月九日より太場鎭附近の戰鬪に參加するに至つた。大場鎭附近の陣地は上海戰線の死命を制する要害で歐洲大戰の陣地戰に經驗を有する外人顧問の指揮下に五ヶ年間の長日月を費し近代的築城を用ゐベトン堡壘を構築し家屋の悉くが陣地となり無數の銃眼を設けた堅壘で敵右翼陣地の中樞を成すのみならず上海南京を通ずる京滬鐵道を掩護する爲めの重要據點であつた。所屬中隊は葛家神樓宅附近の陣地を占領し敵陣地の要點に對し逐次卓越せる威力を發揚し以て當面の友軍歩兵の攻擊に協力したが氏は終始一貫積極的に活躍し中隊戰鬪に貢献せる所頗る多かつた。十月十五日の砲戰中氏は段列長の指揮下に八房宅より砲側へ彈藥搬送中所屬中隊は敵の一部が退却中なるを認め之に猛射を加へた。敵亦之を收容せんが爲め猛烈に應射して激戰となり砲側への彈藥補充は極はめて危險となつた。然れども氏は克く戰機を理解し

敢然として段列放列陣地間を往復し彈藥を砲側に搬送し中隊の戰鬪を容易ならしめた。然るに此の際無念にも左背部に盲貫銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏や質實剛健にして常に責任を重んじ鄉に在りては一家の中堅として孝養を盡し出でゝ聖戰に從ふや霖雨泥濘の中に默々として自己の職分に邁進し又嵐の如き激戰場に敵の彈雨を浴びつゝ彈藥の整備搬送に任じ以て中隊戰力を維持培養し所屬中隊をして常に赫々たる武勳を奏せしめた。寔に是れ檄の下の力持に類する尊き功績であつて滅私奉公の信念に横溢するの士にあらざれば能くし得ざる所である。斯かる誠實忠勇の士を喪へるは痛惜禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に牢記せられ其の不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族の將來に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日砲兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　山邑傳治郎

大敵より奇襲を受け孤軍奮鬪職に殉したる輜重兵

氏は京都市上京區新町通りの人にして父を彌三郎母をつやと云ひ明治四十四年十一月二十五日に生れ妻そめとの間に未だ子はなかつた。資性溫厚篤實にして近隣の風評も誠に良好であつた。大正十五年三月室町高等小學校を卒業し其の後家業たる建築請負業に從事し又在鄉軍人會室町分會の組長として率先垂範分會の發展に盡瘁してゐた。昭和七年六月特務兵として京都輜重兵大隊に入營二ヶ月間軍隊教育を受け翌七月歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月一日加藤部隊に應召同月二十三日勇躍征途に就いた。北支到着後は九月十五日より二十七日に亘る涿州保定の會戰間及二十八日より十月十二日に亘る石家莊及澄陽河附近の會戰間氏は藤本部隊長の指揮下に屬し第二小隊殿兵として晝夜兼行惡路の行軍を續け中隊の彈藥補充に遺憾なからしめ。次で十月十三日より十一月三日に亘る太原攻略戰に於ては右縱隊配屬糧秣中隊として險峻なる雜路を踏破し不眠不休困難なる連絡補充に從事し補給の大任を

完うし爲めに氏の所屬輜重隊は時の軍司令官より感狀を附與せられた。

次いで十一月三日には楡次附近に前進して敵の側背攻擊を任とする左追擊隊配屬輜重として平定を出發險峻なる山岳離路を急進せしが四日未明所屬班の駄馬難路の爲に斷崖より轉落斃死し班長以下同班の十六名は萬難を排して該馬積載の彈藥を收容し中隊主力に追及を急いだ。而して同日午後一時三十分廣陽村東方七百米の河原に差掛るや突如迫擊砲及重火

器を有する優勢なる敵の攻擊を受くるに至つた。殆んど戰鬪力なき而かも十數名の輜重として今は絶體絶命の境地に立ち至つた。班長以下氏等十六名は今は之迄なり宜しく皇國軍人の意氣を示して斃れんのみと一同悲壯の決意を以て敢然此の敵に對し攻擊を開始せしが小銃機關銃迫擊砲の猛射炸裂に駄馬は狂奔して右往左往するの狀態であつた。氏は早くも先頭に立ち敵彈雨飛の中をものともせず愛馬を誘導して右方部落に牽き入れ直ちに銃を執りて僅々八名の自衛隊員に加はり敵に肉薄して力戰奮鬪先づ敵の一名を刺殺し更に一歩踏み入らんとせし時無念頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。此の戰に於て氏等班員は遺憾にも大半死傷したが氏等の奮戰に廣陽村にありし中隊は直ちに駈け付け敵は竟に敗退するに至つた。

氏の鄕にあるや在鄕軍人分會幹部として良兵の先達となり其の軍に從ふや唯々後方勤務の重大なるを自覺し不眠不休惡路險難を冒しあらゆる辛酸を克服して其の重任を完うす其の隱れたる而かも偉大なる功績は所屬隊が名譽の感狀を授與せられたるに徵しても明かである。而して一度び敵の急襲を受くるや氏在營間の訓練日短く武技の自信を得るに至らざりしにも拘はらず敢然家を忘れ身を棄てゝ大敵に迫る。是れ其の所掌たる貴重の彈藥を守護すべき責任を痛感せる崇高なる軍人精神の發露に外ならぬ。よしや廣陽村の河原は血に染むるも敵をして一指だも輸送彈藥に觸れしめざりし赫々の武勳は天晴れ皇軍輜重の誇りとして戰史を飾るものである。斯かる忠誠勇武の士を喪ひたるは痛惜禁ずる能はずと雖も氏の名は千載に傳へて芳ばしく其の不滅の英靈は護國の神と祀られ其の神靈や尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　木部恒雄

剛膽不撓の特務兵、率先敵中に突入し自衛を全うす

氏は群馬縣群馬郡元總社村の人にして父を武平母をキチと云ひ明治四十二年十一月二十五日に生れ妻文夫との間には未だ愛子を惠まれなかつた。資性實直にして責任觀念强く事に臨みて沈勇豪膽であつた。大正十三年三月元總社小學校高等科を卒業し又昭和二年三月同校內の實業補習學校を卒業した。其後家業に從事し元總社村消防組小頭を勤め公共の爲大に盡力し鄕黨一般の信望を受けて居た。昭和五年十月宇都宮輜重兵大隊に入營し熱心軍務に精勵し翌十一月下旬歸休除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召小原部隊に屬し第三小隊の特務兵として勇躍北支方面への征途に就いた。斯くて九

月中旬豐台へ到着したが應召以來多數の徴發馬を調教飼育して軍馬の能力を向上せしめ又軍需品の積載卸下を擔任して奮勵努力克く所屬班長を輔佐し任務の遂行に貢献した。

九月下旬所屬兵團の大冊河附近激戰並に保定附近の掃蕩戰に於ては適時適切に第一線部隊に彈藥を補給せんが爲所屬中隊長の指揮下に連日連夜に亘り悪路を突破して强行軍を行ひ敗殘兵所在に出沒する情況下に警戒勤務に服する等あらゆる困苦と危險とを冒し一意任務に邁進した。

所屬部隊は九月二十五日夜保定の西北方約二里に在る馬廠に宿營したが其夜午前四時三十分朝食の準備に從事中の氏は西北方に當り數發の銃聲を聞くや間もなく休宿しありし支那家屋内に敵の敗殘部隊より手榴彈を投擲され氏は爆創を受けた。此爆音を聞いて分隊長以下救援の爲駈けつけたが土壁に妨げられ屋外への攻撃意の如くならず氣丈の氏は咽嗟に古机を利用して踏臺となし土塀を躍り越え敵中に突入した。惜しいかな其際第二の手榴彈を投げつけられ兩大腿部に爆創を受け其場に打倒れた。第六分隊長以下は氏に續いて土塀を乘り越え群がる敵中に突入し之を撃破し敵は屍體二個を遺棄し西方に潰亂遁走した。此戰鬪後氏は直ちに野戰病院に收容され手厚き治療を受けたが十月一日悼ましくも北支戰線の華と散つた。所屬部隊は氏の勇敢機敏なる行動に依り完全に中隊の自衛を全うするを得た。

氏や誠實勤勉克く家庭の中堅として父母を扶け家政を治め又鄕黨の爲公益を圖り軍に從ひては唯々君國の爲自己の任務に邁進し如何なる艱苦も如何なる危險も眼中になかつた。而かも氏の職務たるや極はめて地味にして外觀華かならざるも第一線部隊の戰鬪力維持培養に至大なる貢献を致したるもので其隱れたる努力に對しては深甚なる感謝と敬意を拂はねばならぬ。殊に氏の最期の奮戰たるや實に自隊の危急を救ひ得たる礎石をなせるものであつた。斯る献身的忠勇の士を喪へるは痛恨限なしと雖も其累積せる勳功たるや天晴れ皇軍戰史に牢記せらるべく其不滅の英靈は護國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神としてその前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　下田壯太

特務兵、有らゆる困難を克服して其の任を果たし竟に敵襲に奮戰して散華す

氏は群馬縣佐波郡豐受村の人にして父を百馬亡母をイシと云ひ明治四十四年十一月二十四日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚忠實にして不屈不撓責任觀念强く大事に臨み沈着剛膽であつた。大正十五年三月豐受尋常高等小學校を卒業し昭和三年一月豐受實業補習學校へ入り同六年一月同校卒業翌七年二月輜重兵特務兵として宇都宮輜重兵大隊に入營し除隊後豐受消防組消防手を命ぜられ居村の爲盡瘁して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊第三大隊に編入せられ小行李班員として勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十二日より十四日に亘りては永定河畔殷家舖及門村附近。十五、十六日は拒馬河畔東茨村附近。十七日には平漢線東測地區馬辛莊及蔣各莊附近。十八日より二十日に亘りては平漢線西側地區順台高里店鏡村附近。二十一、二十二日には

大冊河畔黄村附近の各戰闘に參加し此間氏は連日殆ど不眠不休敵の猛火を冒して永定河拒馬河を渡河し或る時は泥濘膝を浸する惡路を暗夜馬匹を勞はりつゝ難行軍を續け或る時は敗殘兵出沒する地區を終夜急行し以て所屬隊の戰闘遂行に支障なからしめ更に九月二十三、二十四日保定附近の殘敵掃蕩戰に際しては既に連日連夜に亘る疲勞困憊は其の極に達せしが氏は凡あらゆる辛酸困苦缺乏に對し不屈不撓己を後にし馬匹を愛護して第一線に跟隨し適時彈藥を補給し所屬隊の戰闘遂行に貢献する所大なるものがあつた。

十月一日氏は大隊小行李長田島伍長の指揮下に彈藥輸送に從事し方須橋附近に於て大休止を行ひ馬匹に飼付けを爲しありしに午後零時四十分突如南方綿畑に約四十名の敗殘兵現はれ我が小行李の手薄に乘じて猛烈に襲撃して來た。氏は小行李長の命により機敏に愛馬を安全地帶たる凹地に牽き入れ直に銃を執りて剛膽沈着群がり來る敵を猛射し至近距離の事とて百發百中敵に多大の損害を與へたが左側背綿畑を潜行し來る敵より手榴彈を投擲せられ無念左腹部と左大腿下部に其の破片創を受け其場に昏倒した。當時戰友又相次いで死傷し小行李は累卵の危き狀況となつたが所屬大隊は此の危急を知り直ちに急援隊を派遣し交戰三十分にして殆ど敵を潰滅したのであつた。氏は負傷後收容せられ應急手當の上列車により保定に後送せられたが惜しくも午後五時名譽の戰死を遂げた。氏は臨終の稍々前「故郷を出る時死は覺悟……」と微かに口ずさみ瞑目したのであつた。

氏は戰陣に立つや素より決死奉公の覺悟あり彈雨の下も地形の困難も、飢餓も、未だ氏を屈するに至らなかつた。氏は第一線に戰はざるも疲勞困憊の身を以て愛馬を勞はりつゝ身は終始第一線に跟隨活躍し激戰の都度消耗多き彈藥の補給に聊かも支障なからしめ第一線の戰力を培養して遺憾なかつた。其の第一線の華々しき戰勝の裏に隱れたる此の功績は蓋し沒すべからざるものである。而かも偶々敵襲を受くるや短時日の軍隊教育を受けしに過ぎざる氏が果敢に向ひ敢然應戰身は斃るゝも敵をして一指だも輸送物件に觸れしめざりし如きは輜重兵の精華と謂ふべきである。氏や惜しくも北支の華と散りしと雖も其の赫々の武勳は千載の下皇軍戰史に輝き其の芳名は語り傳へて萬世に朽ちざるべく英魂不滅護國の神となり神靈尚も皇國を守護し遺族に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章は賜はつた。

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　比樂　清

至誠一貫の模範青年、上海戰線に活躍して職に殉す

氏は愛知縣幡豆郡西尾町の人にして父を秀三郎母をくはと云ひ大正五年十月二十一日に生れ未だ獨身であつた。性快活にして孝心深く志操堅確にして特に公益に意を致し郷土の模範青年として其の將來を嘱目されて居た。昭和六年三月郷里の高等小學校を卒業し其の後は家庭に在りて家事に精勵するの外青年團の幹事として推擧せられ大に其の手腕を發揮した。氏の郷土雲母山は眺望佳絶なる爲め遠近の遊覽客多いのであるが山腹には往昔雲母を採集せる横穴縱穴凡そ二百八十箇所もあり而かも雜草は掩はれある爲め老人小兒の墜落して慘死する者年々四、五名も出で町當局も對處策を考へありしが氏は率先青年團に依る埋立計畫を立て自ら鍬を執りて之に從事した。當時青年等は社會奉仕の觀念薄かりしも氏の熱誠

に勵かされ遂に全部の場立を完了して遊覽客の安全を圖り又同時に鄉土青年の氣風を一變せしむるに至つた。

支那事變起るや昭和十二年八月輜重兵特務兵として應召高橋部隊に屬し勇躍江南戰線に向ひ出征した。斯くて九月上旬上海戰場の一角に到着せしが江南特有の霖雨降り續き見渡す限り泥土の巷と化し人も馬も膝を沒する有樣にて行動頗る困難であつた。氏の所屬隊は九月六日より十二日にかけ揚行鎭附近の友軍第一線部隊へ彈藥補給の重任を課せられた。部隊は連日連夜活動し就中泥土中の行動に疲勞甚だしかりしも氏は率先垂範彈雨を冒して任務に邁進し所屬部隊の重任遂行に寄與せる所頗る多かつた。

九月十二日に至り所屬部隊は所屬兵團左翼援助の重要命令に接して幸田大隊を編成したが氏は進んで其の一員に加はり岡本中隊渡邊小隊の要員として吳淞クリーク北岸唐家宅附近に進出し河幅約四十米のクリークを挿んで敵と相對し不眠不休實に四日間に亘り猛烈なる銃砲火を浴びつゝ歩哨傳令或は斥候勤務に服した。其の間氏は慧眼機敏豪膽の眞價を發揚して部隊の行動に寄與し上官の信賴と戰友の景仰愈々厚きを加へた。同月十七日午前四時頃又々敵陣地より猛烈なる集中射擊を受け逆襲の徵候を認むるや全員非常配備に就いた。此の時氏は選ばれて中隊の左翼方面の搜索斥候に加はり迫擊砲の彈幕を突破して沈着勇敢に行動し敵逆襲部隊の情況を偵察し來り以て中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。而して氏は續いて守地を死守しありしが午前五時三十分頃より隊の砲擊益々熾烈を加へ凄慘の光景を呈して來たが神色自若克く任務を遂行中不幸一砲彈氏の身邊に落下炸裂し頭部右肩胛部左足部の重傷を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏や志操高邁にして篤行克く一鄉青年の風敎を醇化せしめ公益を圖りて不朽の事績を遺し出でゝ聖戰に從ふや日夜奮勵努力幾多の險難を冒して第一線諸部隊の戰力を培養し又重要戰機に投合して一方面の戰線を擔當して難局に克く守備を完うした。あゝ氏や未だ正規の軍隊敎育を受けあらざる身を以て克く國民皆兵の實を擧げ上下の信賴を一身に蒐む。寔に是れ軍民の鑑とすべき所參戰日尙淺く斯かる誠忠にして有爲の士を喪へるは轉た愛惜痛悼に堪へざるも氏の生涯たるや至誠一貫其の功績たるや天晴れ皇軍戰史に牢記され又鄉土の歷史に不朽の芳名を留め不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族の將來に尊き加護を垂れ更に鄉土の爲め尊き光と力とを投げ與ふる事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

支那事變

忠勇列傳　陸軍之部　第三卷（終）

忠勇顯彰會趣意概歷

一、本會ハ我國軍人軍屬ニシテ明治三十七年以後ノ戰局ニ於テ忠勇義烈偉勳ヲ樹テ遂ニ國難ニ殉シ萬世ノ龜鑑トスヘキモノヲ顯彰シ其偉績ヲ不朽ニ傳ルコトヲ目的トスル社團法人ナリ

一、本會ハ明治三十七年五月故男爵九鬼隆一氏ノ主唱ニ依リ創立セラレ、皇族殿下ヲ總裁ニ推戴シ奉ル允許ヲ得、畏クモ明治三十八年四月十日ニハ　明治天皇皇后兩陛下ヨリ、昭和三年八月六日ニハ　今上陛下ヨリ御奬勵ノ思召ヲ以テ御下賜金ヲ拜受シ、又官界民間篤志家ノ賛助ヲ得今日ニ及ベルモノニシテ、其主ナル顯彰事業トシテハ忠勇列傳ヲ編纂シ各遺族ニ忠死セル愛子愛夫ノ戰場ニ於ケル偉績行動ヲ知ラシメ、又全國護國神社、主ナル圖書館教化團體官衙軍隊等ニモ寄贈シ、其忠烈ヲ不朽ニ傳ルト共ニ、國民精

神ノ教化作興ニ資シ、既ニ創立以來卅六年、此間日露戰役、青島戰役、西伯利亞出兵、歐洲大戰ニ於ケル地中海北海戰死者、第七十第四十三潛水艦殉難者、濟南事變、臺灣霧社事件、滿洲上海事變の忠死者列傳ハ夫々編纂寄贈ヲ終リ、今回更ニ陸海軍省其他篤志家ノ援助協力ノ下ニ支那事變忠死者ノ列傳編纂ニ着手セル次第ニシテ、今事變ニ於ケル忠死者總數ハ豫定シ難キモ本事變忠勇列傳ハ百數十卷ニ及フ見込ナリ。

一、現在本會總裁及役員ハ左ノ如シ。

忠勇顯彰會總裁及役員

總裁元帥陸軍大將大勳位　梨本宮守正王殿下

會頭　樞密顧問官　清水澄

常任幹事　陸軍少將　石坂弘毅

幹事　（イロハ順）

陸軍省人事局長陸軍少將　飯沼守

貴族院議員　稲畑勝太郎

海軍省人事局長海軍少將　伊藤整一

貴族院議員　德富猪一郎

貴族院議員陸軍中將　大島健一
貴族院議員　小倉正恒
宮中顧問官海軍中將子爵　小笠原長生
實業家　小畠元三郎
貴族院議員　小野耕一
陸軍大將　川島義之
樞密顧問官海軍大將　有馬良橋
樞密顧問官陸軍大將男爵　奈良武次
貴族院議員　永田秀次郎
實業家　下鄕傳平
樞密顧問官海軍大將男爵　鈴木貫太郎

評議員

（イロハ順）

陸軍中將　林彌三吉
著述家　神田正雄
陸軍中將　中村濱作
陸軍中將　中島虎吉
實業家　成富道正
海軍少將　向田金一
實業家　奥村安太郎
海軍中將　大湊直太郎
從四位勳三等　山岡國利
陸軍中將　佐藤清勝

陸軍省人事局恩賞課長　陸軍歩兵大佐　佐々眞之助

海軍省人事局第二課長海軍大佐　三戸壽

主査委員

海軍　大佐　猪瀬乙彦

陸軍歩兵大佐　内田保雄

（常任）陸軍砲兵大佐　澁川政雄

（イロハ順）

昭和十四年七月十三日印刷
昭和十四年七月十八日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　東京市澁谷區穠田一丁目一〇一番地　社團法人　忠勇顯彰會
右代表者　澁川政雄

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目十一番地　百目木智璉

印刷所　東京市神田區三崎町二丁目十一番地　株式會社共榮舍

發行所　東京市澁谷區穠田一丁目一〇一番地　社團法人　忠勇顯彰會

版權所有

ㅓㅏ 7C 6·1

終